

## 第1回 金沢城二の丸御殿復元整備専門委員会

開催日 令和3年8月3日（火）

場所 石川県庁 1109 会議室およびオンライン会議

会議結果（主な意見）

- ・ 質の高い調査により多くの成果が得られており、成果を県民に情報発信することも重要。
- ・ 復元整備事業を通して学術的な研究が進展することも大きな意義。
- ・ 建造物の復元だけでなく、二の丸全体の整備という視点が重要。

会議資料（抜粋）

- ・ 別紙

# 第1回 金沢城二の丸御殿復元整備専門委員会

時：令和3年8月3日（火） 13：30～16：00

於：石川県庁 第1109会議室

---

## 次 第

### 1 開会 開会挨拶

### 2 議事

#### （1）専門委員会の設置

- ・要綱説明、委員紹介
- ・委員長の選任

#### （2）復元整備に向けた取り組みの状況

- ・史跡金沢城跡（金沢城公園）の経緯・現状 【説明資料1】
- ・二の丸御殿に関する調査検討の状況 【説明資料2・3】
- ・二の丸御殿の復元整備に向けた基本方針 【基本方針】

#### （3）意見交換

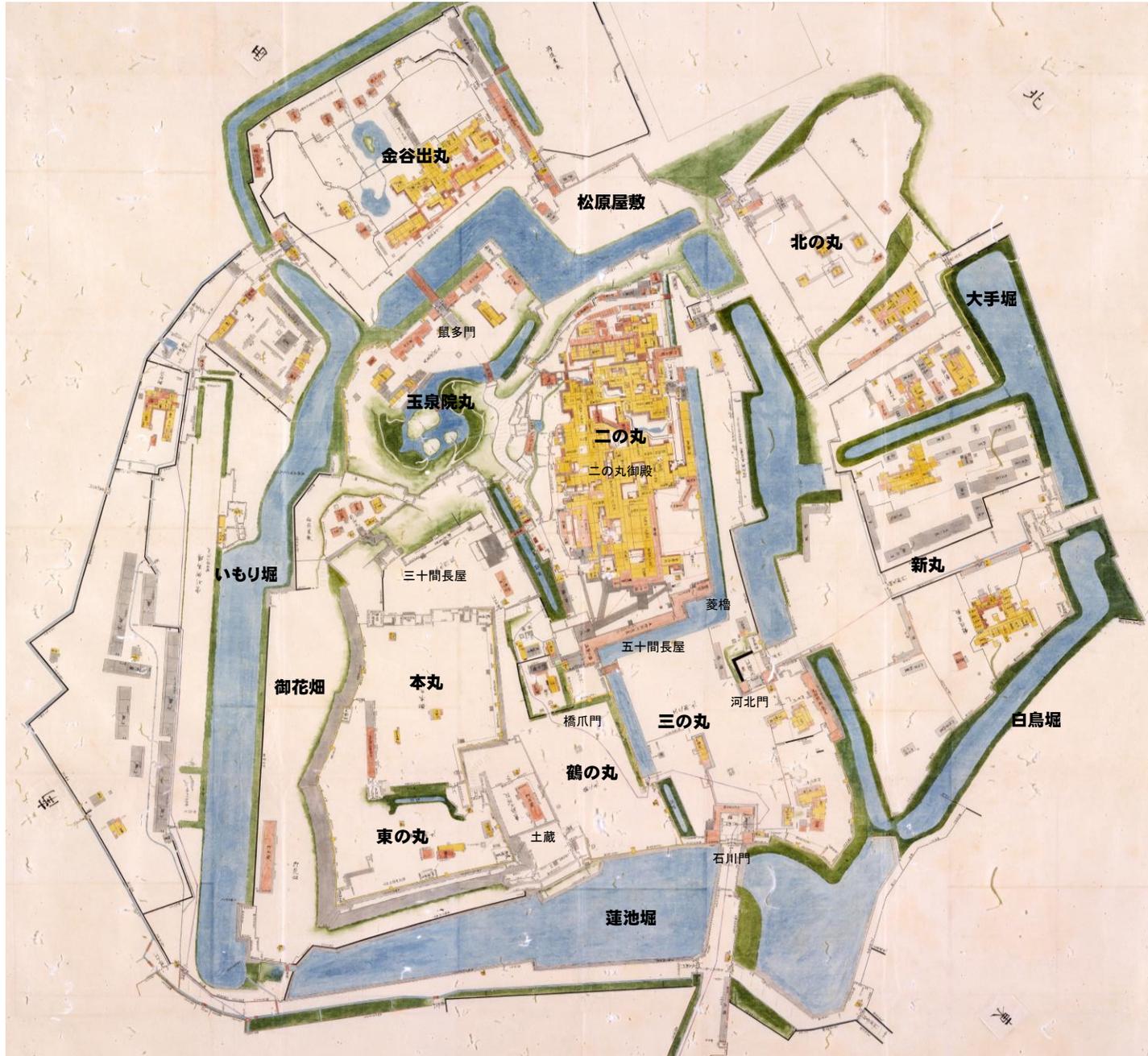
### 3 閉会

# 史跡金沢城跡の経緯・現状

- 1 史跡金沢城跡の経緯
- 2 史跡金沢城跡の現状（現況平面図、航空写真）

令和3年8月3日

石川 県



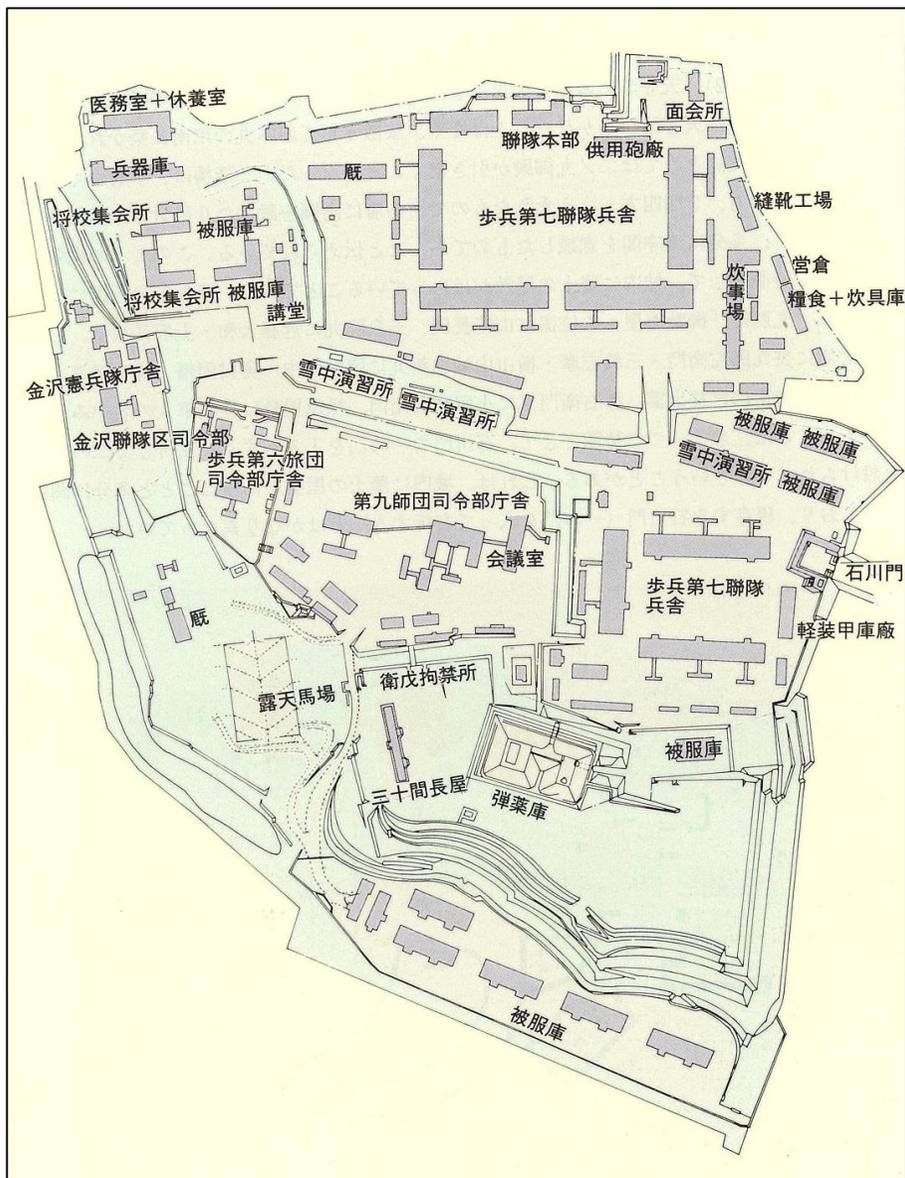
主要事項一覧

西暦	和暦	主要事項
1546	天文15年	金沢御堂が創建される
1580	天正 8年	織田信長と本願寺一向一揆の講和となったが、金沢御堂が攻められ落城、佐久間盛政が最初の金沢城主となる
1581	天正 9年	前田利家、織田信長より能登国を与えられ七尾城に入る
1583	天正11年	利家、北加賀二郡加増され金沢城に移る
1586	天正14年	利家、この頃金沢城に天守を造営
1592	文禄元年	利家、金沢城本丸に高石垣を作らせる
1599	慶長 4年	城内に内総構を築造する。利家死去し利長が金沢城主となる
1600	慶長 5年	利長、関が原の戦いで徳川方に属し参戦、南加賀二郡の加増うける
1602	慶長 7年	天守に落雷があり炎上する
1605	慶長10年	利長隠居し、利常が金沢城主となる
1610	慶長15年	外総構を築造する
1620	元和 6年	金沢城本丸が焼失し、翌年本丸御殿などを再建する
1631	寛永 8年	金沢城下で大火があり、金沢城も焼失する(寛永の大火) 幕府の許可を受け、二の丸を拡張し、御殿などを造営する
1632	寛永 9年	辰巳用水を開き、城内に引水、城内の堀が水堀となる
1643	寛永20年	城内に東照宮を造営する
1645	正保 2年	光高死去し綱紀が跡を嗣ぐ
1652	承応元年	城内に時鐘を設置する
1661	寛文元年	綱紀、金沢城に初めて入る
1662	寛文 2年	石垣普請を幕府に申請(土橋門石、本丸西、玉泉院丸北など)
1667	寛文 7年	石垣普請を幕府に申請(二の丸北の方石垣)、大型の城下町絵図を作成
1671	寛文11年	石垣修理を幕府に申請
1676	延宝 4年	作事所を新丸に移し、その跡に御庭を作る(兼六園の始まり)
1688	元禄元年	千宗室、玉泉院丸で作庭する。新丸に細工所を置く。時鐘を新丸に移す
1697	元禄10年	二の丸御殿奥向等の増改築工事竣工
1755	宝暦 5年	幕府巡見使、金沢城内を見分する
1759	宝暦 9年	金沢大火で、金沢城の大半が焼失する(宝暦の大火)
1763	宝暦13年	五十間長屋下石垣の修復始まる
1772	安永元年	河北門の再建なる
1788	天明 8年	石川門の再建なる
1799	寛政11年	金沢に地震、石川門などに被害
1808	文化 5年	二の丸大火で、御殿全焼(文化の大火)
1810	文化 7年	二の丸御殿を再建する
1858	安政 5年	三十間長屋が再建される
1863	文久 3年	齊泰が夫人のため二の丸に御守殿作る。母のため兼六園内に巽御殿作る
1869	明治 2年	藩知事慶寧、二の丸御殿から本多邸に移る

江戸時代後期の金沢城「御城中巻分基絵図」(横山隆昭氏蔵)

経緯	保存・活用に関する計画等	保存修理・整備事業等（主なもの）
～明治2年(1869) 加賀前田家の居城		
明治 2年(1869) 版籍奉還 明治 4年(1871) 兵部省（後の陸軍省）の所管 明治14年(1881) 二の丸御殿、菱櫓等焼失		
昭和24年(1949) 金沢大学キャンパス 昭和25年(1950) 石川門重要文化財指定 昭和32年(1957) 三十間長屋重要文化財指定 平成 7年(1995) 金沢大学移転	平成6～7年(1995) 金沢城跡整備計画、整備実施計画	昭和34年(1959) 石川門保存修理完了 昭和44年(1969) 三十間長屋保存修理完了
平成 8年(1996) 石川県が大学用地を取得、公園整備着手 平成13年(2001) 金沢城公園開園 平成20年(2008) 金沢城跡 史跡指定 土蔵(鶴丸倉庫)重要文化財指定	平成17年(2005) 金沢城復元基本方針検討委員会報告書 平成18年(2008) 金沢城復元整備計画（第二期整備） 平成23年(2011) 史跡保存管理計画策定 平成27年(2015) 金沢城公園第三期整備計画 平成30年(2018) 石垣の保存管理及び保全対策に係る計画書 令和 2年(2020) 金沢城二の丸御殿調査検討委員会報告 令和 3年(2021) 史跡保存活用計画策定 金沢城二の丸御殿の復元整備に向けた基本方針	平成13年(2001) 公園の基盤整備 菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓、内堀復元 平成22年(2010) 河北門復元、いもり堀水堀化 平成26年(2014) 石川門保存修理完了 平成27年(2015) 橋爪門二の門復元 玉泉院丸庭園整備 令和2年(2020) 鼠多門復元、鼠多門橋整備 丸の内園地石垣の保全対策着手 令和3年(2021) 二の丸御殿の復元整備 事業着手

陸軍施設配置図

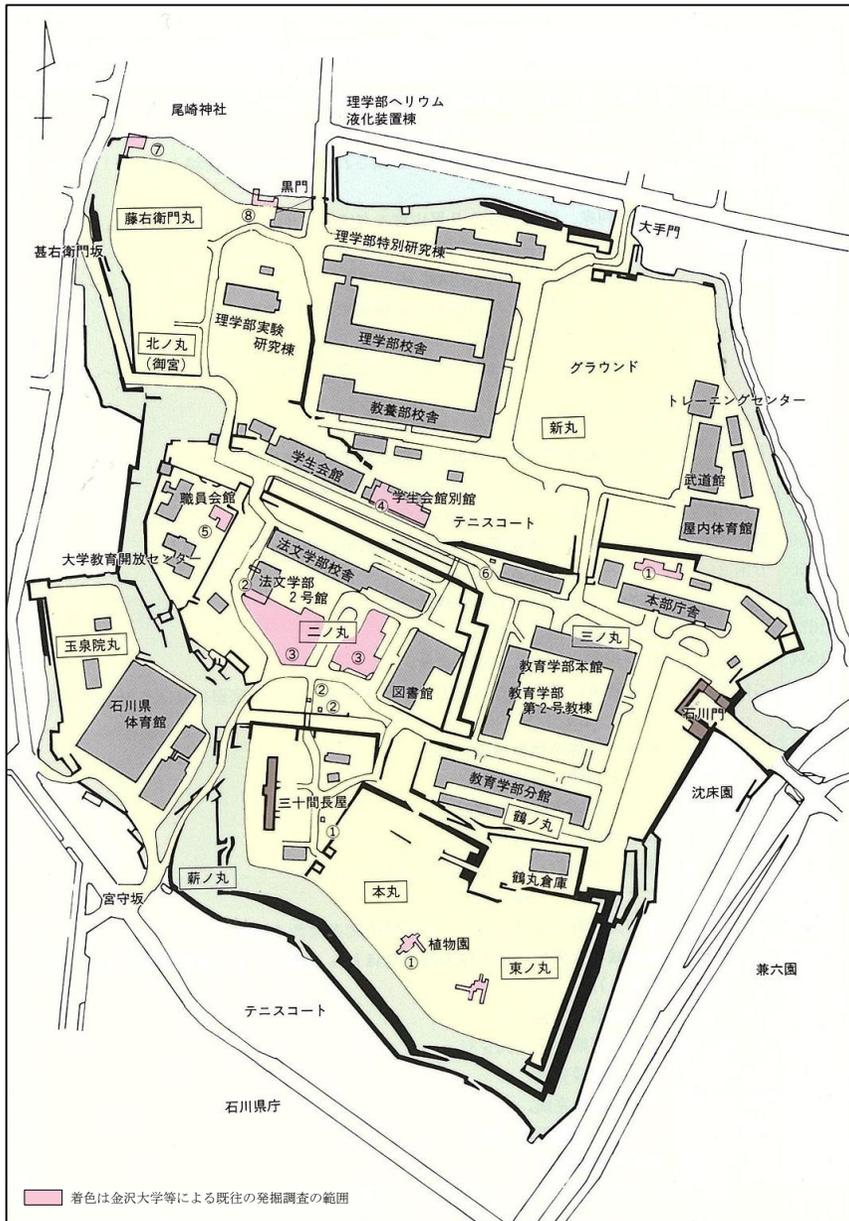


昭和16年(1941)の配置図 金沢城跡遺構実態調査概要報告書より



大正13年(1924)撮影 金沢城跡遺構実態調査概要報告書より

金沢大学城内キャンパス配置図



金沢城跡遺構実態調査概要報告書より



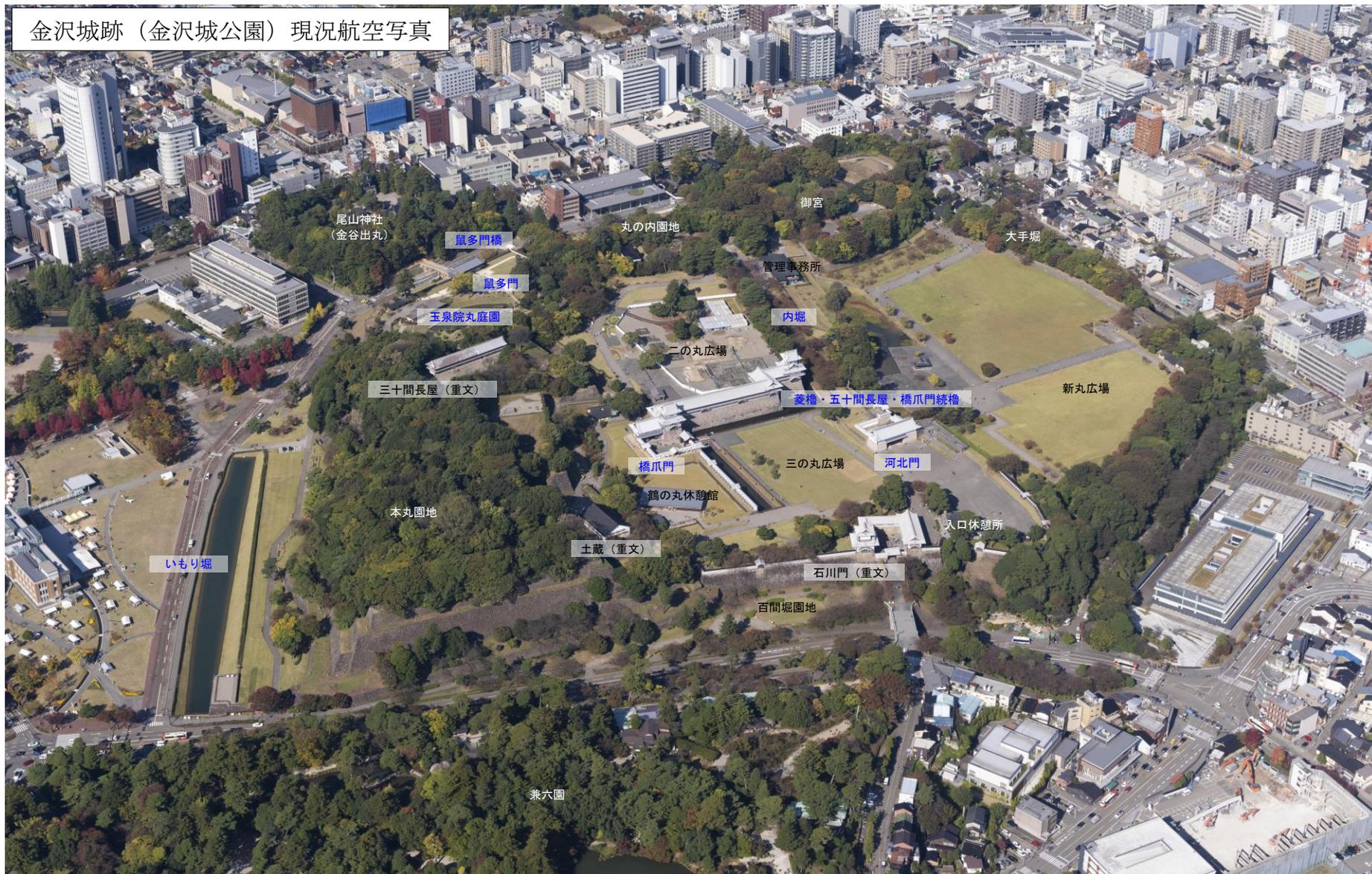
金沢大学城内キャンパス全景 金沢城跡遺構実態調査概要報告書より



金沢大学当時の二の丸の状況 金沢城跡遺構実態調査概要報告書より



金沢城跡（金沢城公園）現況航空写真



(凡例)

青字 公園整備により復元・整備した施設等

令和2年10月撮影

# 金沢城二の丸御殿に関する令和2年度の調査

- 1 関連する建築物等の調査
- 2 埋蔵文化財確認調査

令和3年8月3日

石川 県

## 中村神社拝殿（旧二の丸奥能舞台）

## 1. 調査概要

中村神社拝殿は金沢城二の丸御殿の奥能舞台を明治3年に卯辰山招魂社へ移築、昭和40年に現在地へ移築した建物と伝えられている。

今回、建築実測図を作成するための調査、及び痕跡や樹種、時代区分等の調査を実施した。

目的 建築遺構を調査して、二の丸御殿奥能舞台を移築したものであることを検証する  
調査 実測調査  
番付調査  
仕様調査（樹種区分、時代区分）  
痕跡調査

日程 令和2年  
7月～9月 図面作成のための実測調査  
10月～12月 番付、仕様、痕跡調査  
3月 樹種調査、確認調査

成果概要 ○明治3年と昭和40年に移築されたことを確認した。（小屋裏の棟札など）  
○二の丸御殿小書院下段の間の折上格天井を移築したことを確認した。（番付、「内装等覚図」より）  
○軸部（隅柱、水引虹梁、丸桁）、墓股、欄間彫刻が二の丸御殿奥能舞台の材であることを確認した。  
（隅柱に橋掛りが取り付いたと考えられる位置への埋木痕、丸桁天端への妻壁板の小穴痕、「日並記」の雲龍彫刻の記述と一致（金沢城調査研究所研究紀要第12号より）など）

各部材の時代区分概要は下記のとおり

・軸部（隅柱、水引虹梁、丸桁）、墓股、欄間彫刻	<u>二の丸御殿奥能舞台を移築（2回）</u>
・折上格天井	<u>二の丸御殿小書院下段の間の折上格天井を移築（2回）</u>
・小屋組（小屋束）	明治3年より古い材
・柱、長押、敷鴨居、建具（棧唐戸、格子戸）	
・小屋組（桔木、土居桁、差母屋・差棟木）、	
・軒廻り（地垂木、飛檐垂木、木負、茅負、化粧隅木）、	
・破風板、登裏甲、縁板、高欄	明治3年の材料
・二重裏甲、野垂木、木舞、木連格子裏板、木階	昭和40年の材料

## 2. 建物概要

年代 1810(文化7)年ごろ 金沢城二の丸御殿奥能舞台建設  
 1870(明治3)年 招魂社拝殿として金沢市卯辰山へ移築 棟札より  
 1965(昭和40)年 中村神社拝殿として金沢市中村町へ移築 棟札より

構造形式 木造平屋建、入母屋造、棧瓦葺、平入

梁間寸法 5,879mm (19.40尺)  
 桁行寸法 5,879mm (19.40尺)  
 平面積 34.56㎡

文化財区分 国登録有形文化財 (2004(平成16)年3月登録)  
 登録基準：造形の規範となっているもの

所有者名 宗教法人中村神社

解説文 金沢城二の丸能舞台を移築改造。方3間、4隅角柱上三斗組、二軒疎垂木、入母屋造、棧瓦葺で、正側に高欄付切目縁を回し、外回りを双折棧唐戸、格子戸引違で仕切り内部は折上格天井とする。内法上の派手な墓股や丸彫嵌め彫刻に往時の豪華な姿をとどめる。



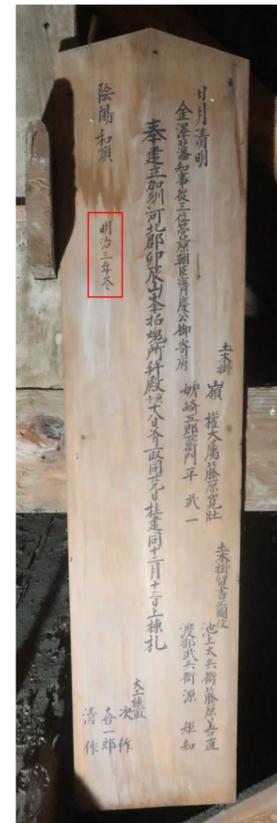
南正面



小屋裏の棟札（左：昭和40年、右：明治3年）



昭和40年棟札

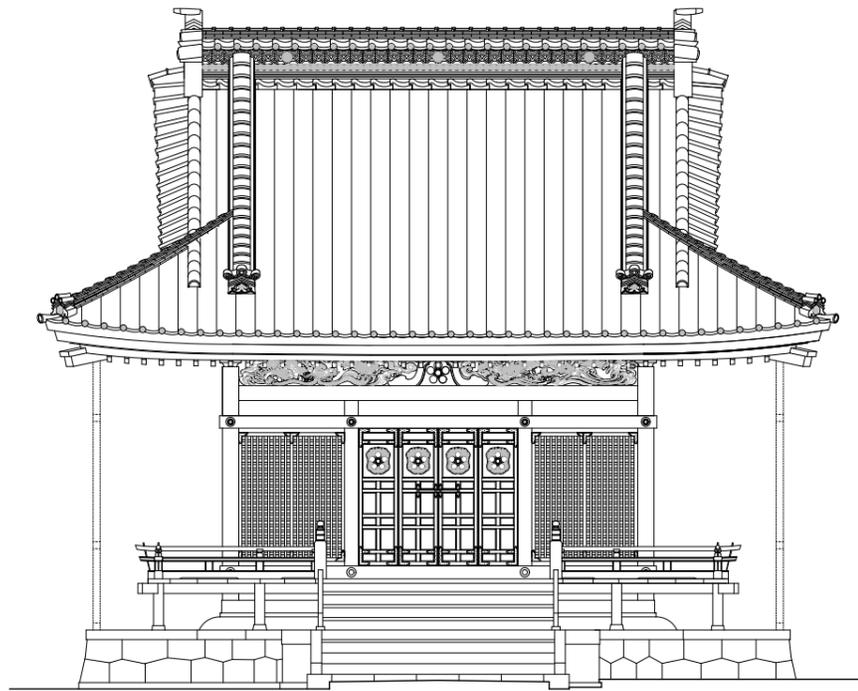


明治3年棟札

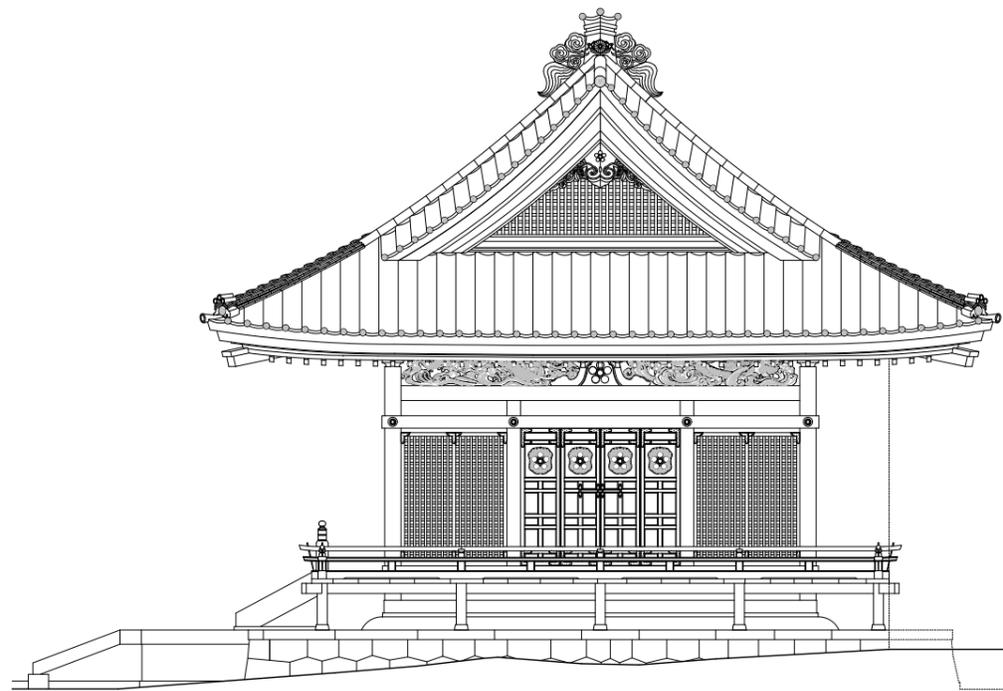


内部

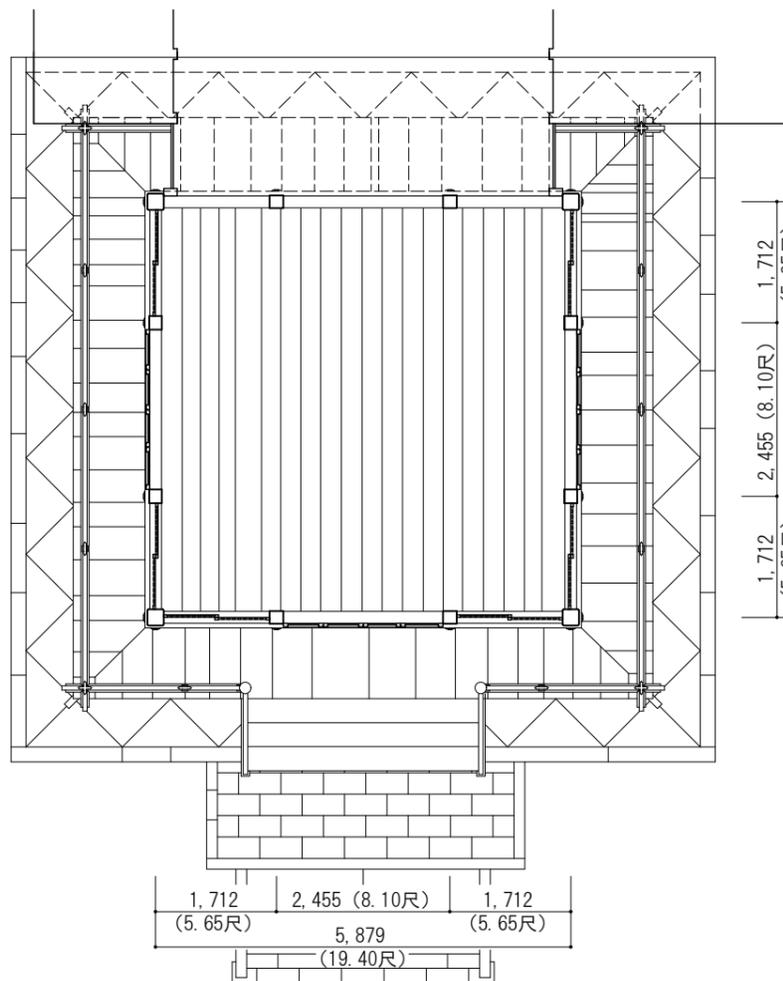
3. 実測図面



南正面図



西側面図

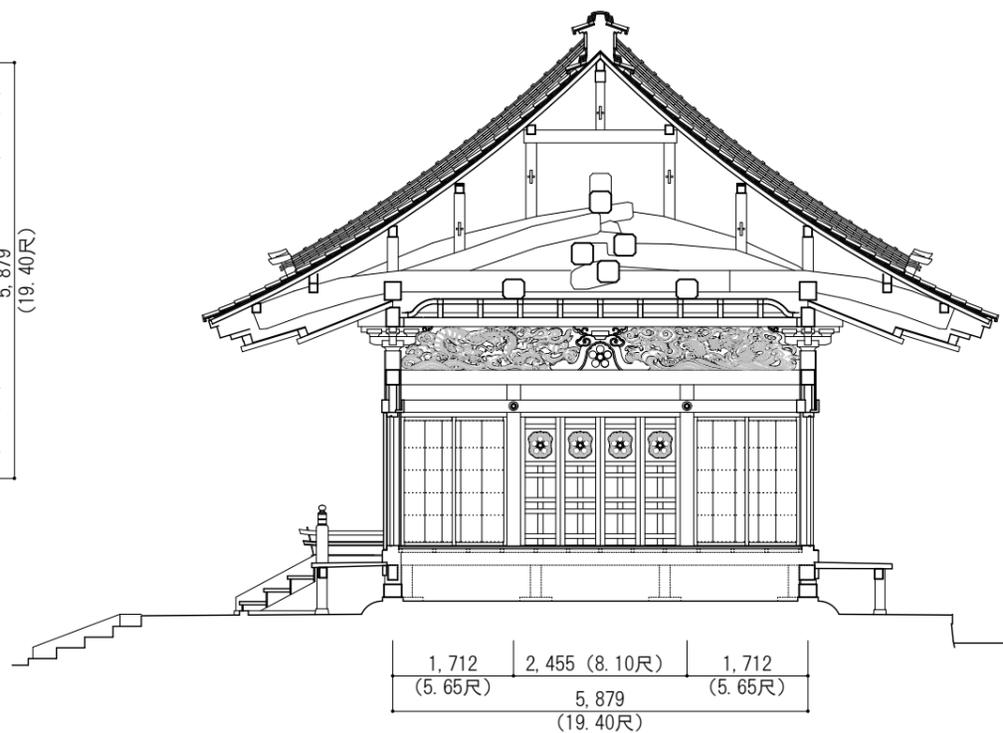


平面図



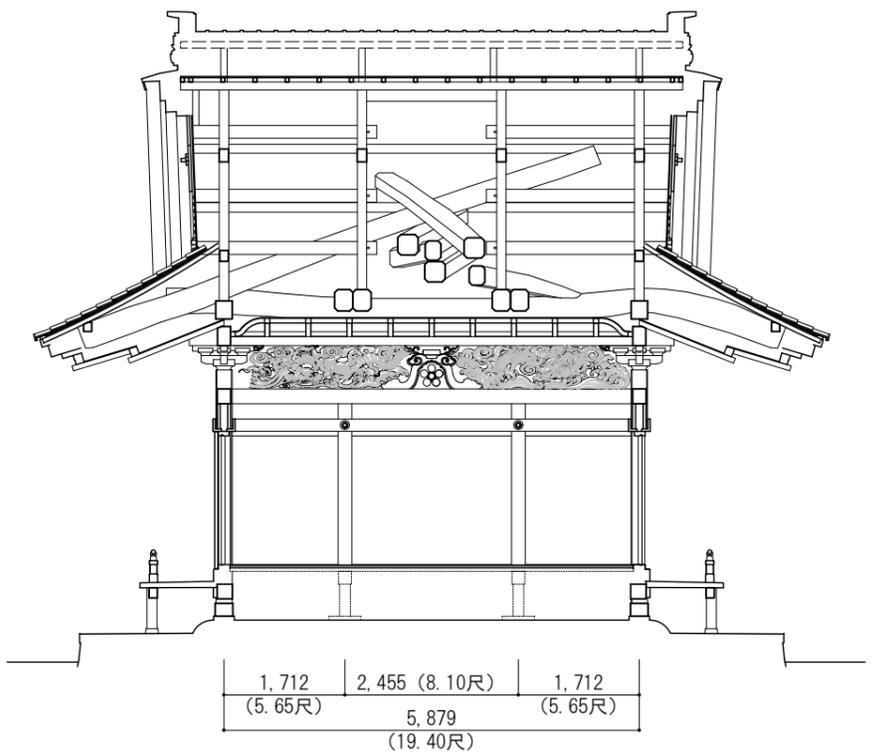
1,712 (5.65尺)  
2,455 (8.10尺)  
5,879 (19.40尺)

1,712 (5.65尺) | 2,455 (8.10尺) | 1,712 (5.65尺)  
5,879 (19.40尺)



梁間断面図

1,712 (5.65尺) | 2,455 (8.10尺) | 1,712 (5.65尺)  
5,879 (19.40尺)



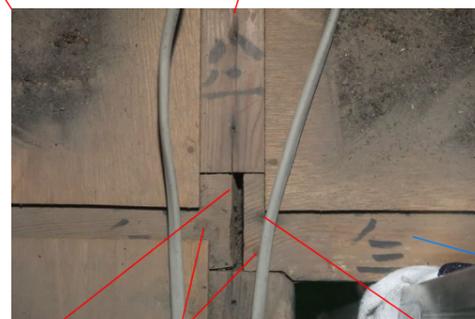
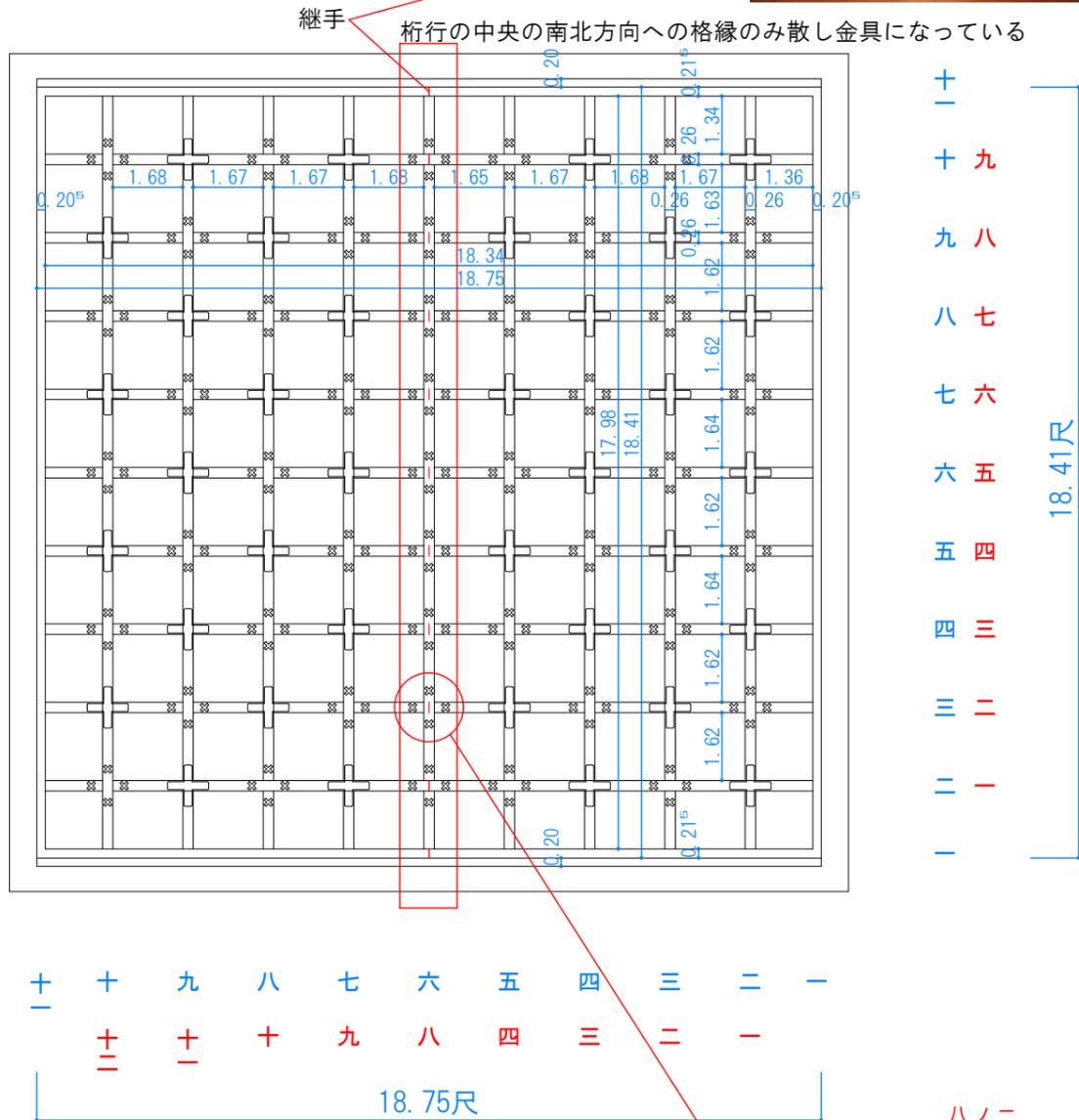
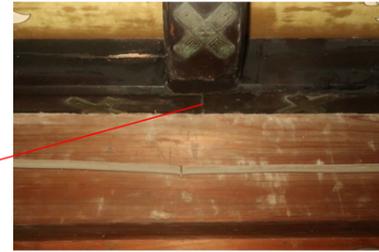
桁行断面図

1,712 (5.65尺) | 2,455 (8.10尺) | 1,712 (5.65尺)  
5,879 (19.40尺)



4. 小屋裏調査

折上格天井の格縁天端、小屋束、母屋等に2種類の番付が確認された。



東西方向の格縁が継がれている S40年移築止め釘(丸釘) M3年移築止め釘(角釘)

青字 移築番付  
赤字 二の丸御殿時の組立番付 天井見上図

青字で記載した番付が移築時の番付、赤字で記載した番付が二の丸御殿時代の番付と推定する。  
桁行方向(東西方向)の当初番付が四通りの次が八通りとなっている。  
桁行方向の中央通り(現六通り)にて東西方向の格縁が全て継がれて釘止めされている。



明治3年棟札表



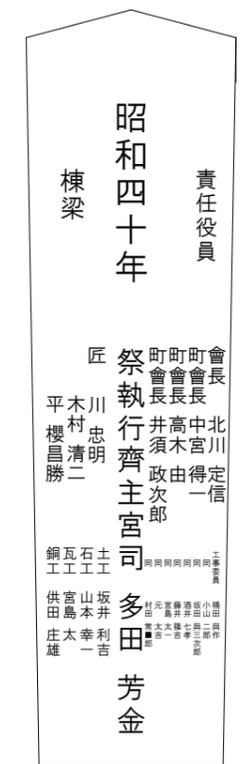
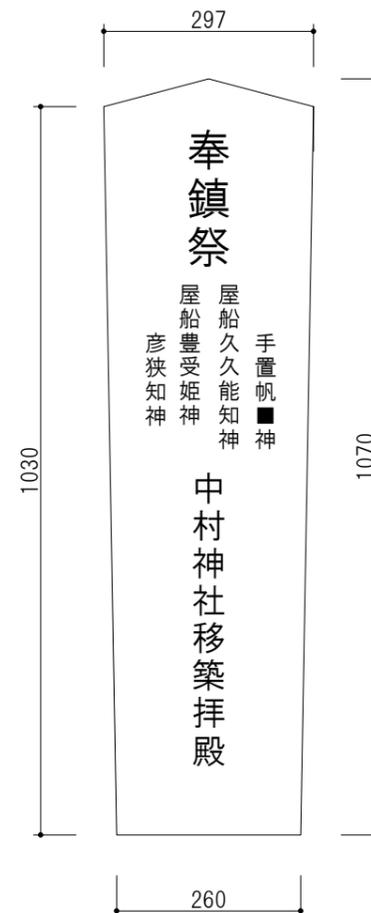
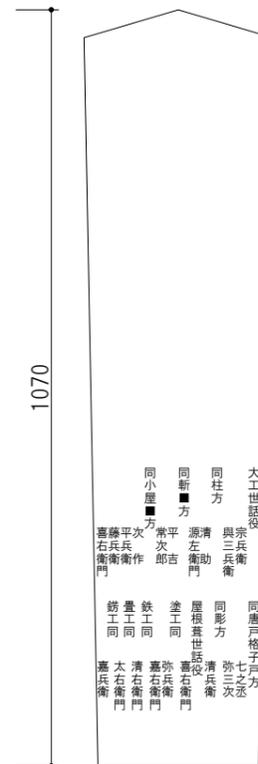
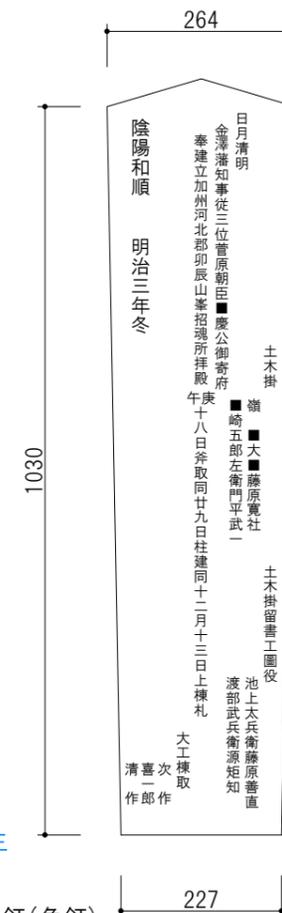
明治3年棟札裏



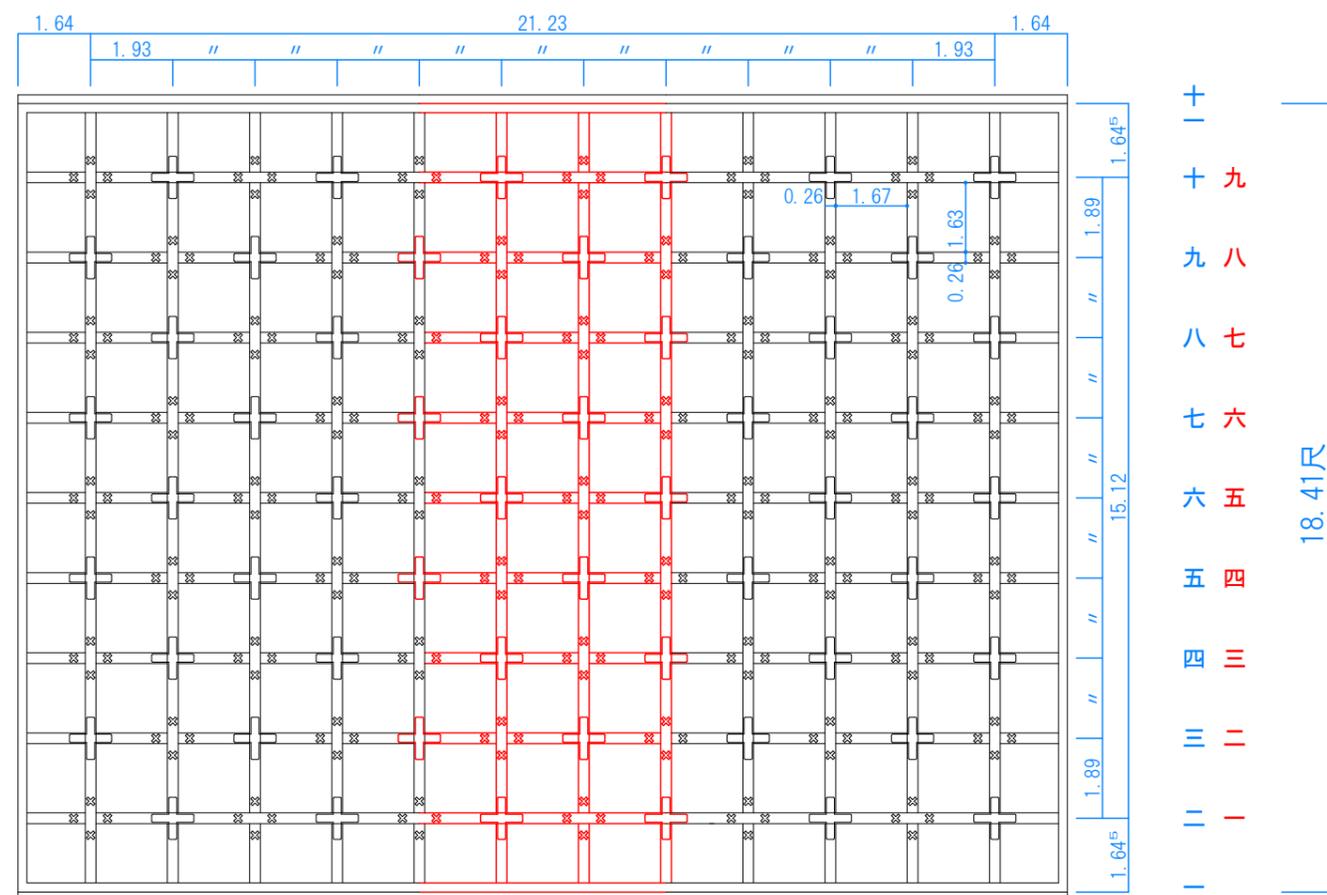
昭和40年棟札表



昭和40年棟札裏



5. 折上格天井の検証



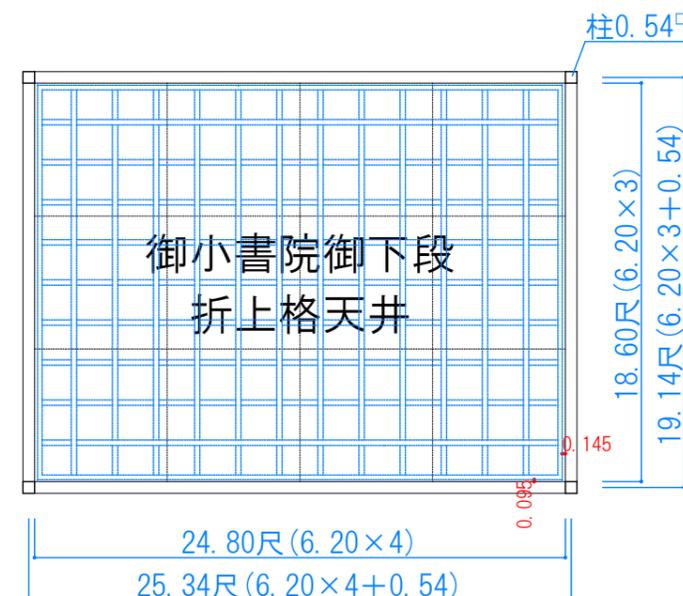
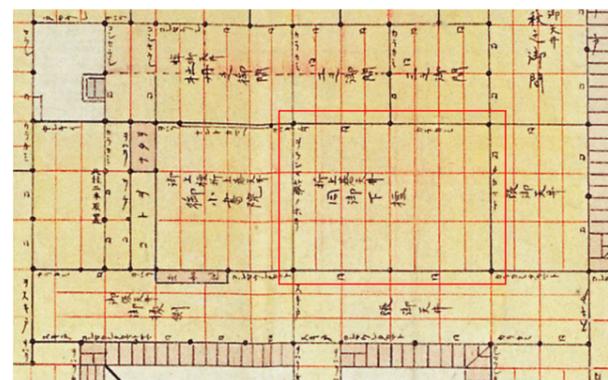
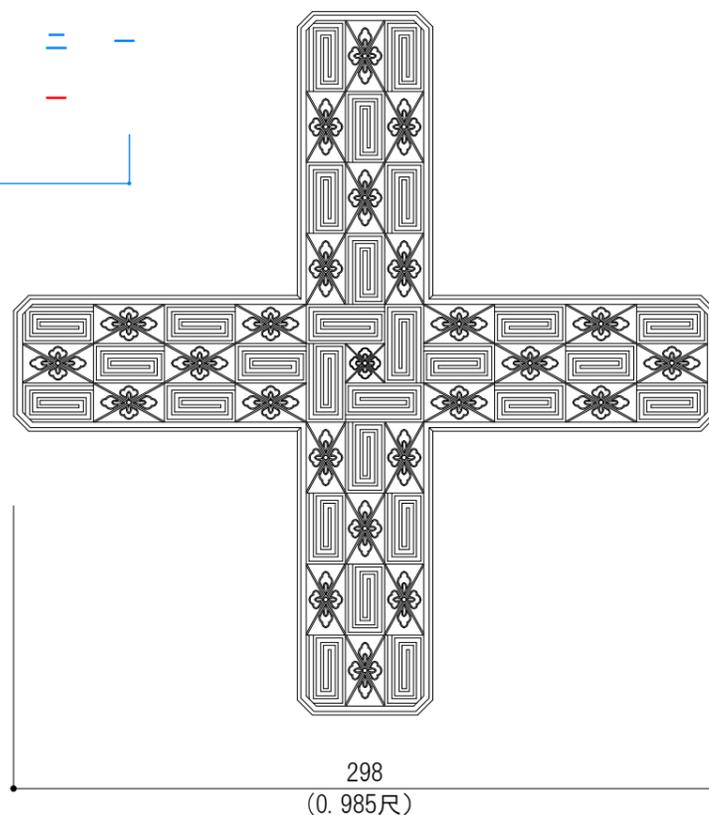
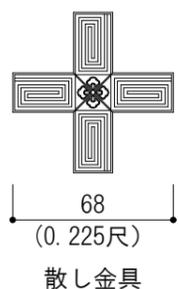
青字 移築番付

赤字 二の丸御殿時代の組立番付

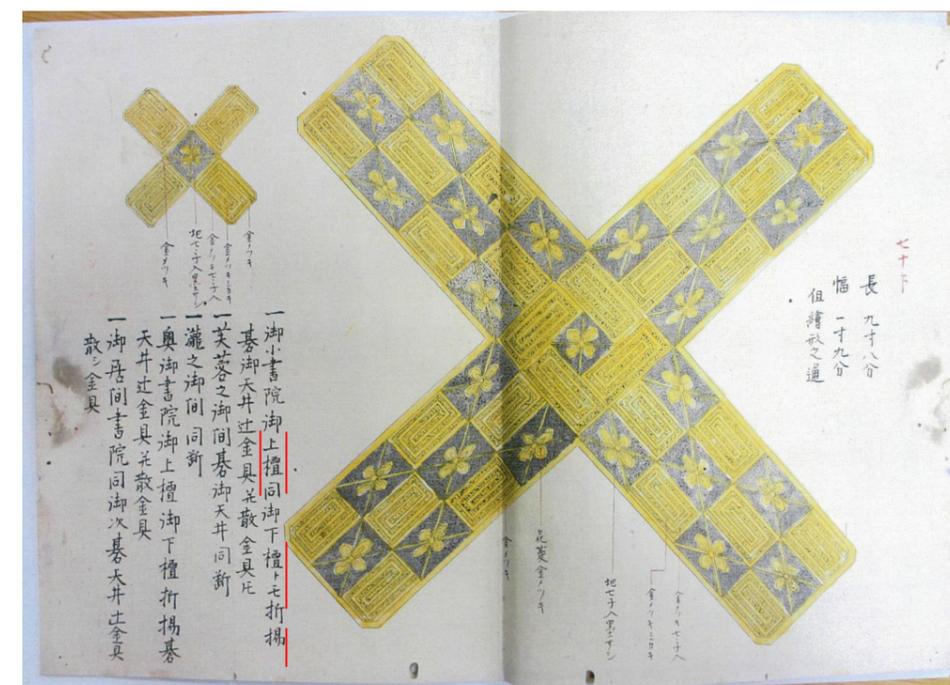
— 復原格縁

天井復原検討図

桁行方向の四通りから八通りの間を現在の格縁間隔で復原すると上図のようになり、辻金具と散し金具も交互に配置されること、南北方向の旧八通り格縁の復原辻金具位置に鋸釘穴の痕跡が確認されることから、当初は3間×4間の間であったことが分かる。内装等覚図において3間×4間の規模で折上格天井を備える間は御小書院御下段のみであることから、明治3年に金沢城二の丸御殿奥能舞台を卯辰山峯招魂所拜殿として移築した際に、御小書院御下段の折上格天井を切り縮めて拜殿の天井に移築したと考えられる。



御小書院御下段の3間×4間の間は6.20尺の畳割りで計画されており内法が18.60尺×24.80尺となる。復元検討図の内法は18.41尺×24.51尺となり、それぞれ0.19尺と0.29尺、片側では0.095尺と0.145尺の差が生じる。この差については廻り縁等の納まりであったと推定して検討する。

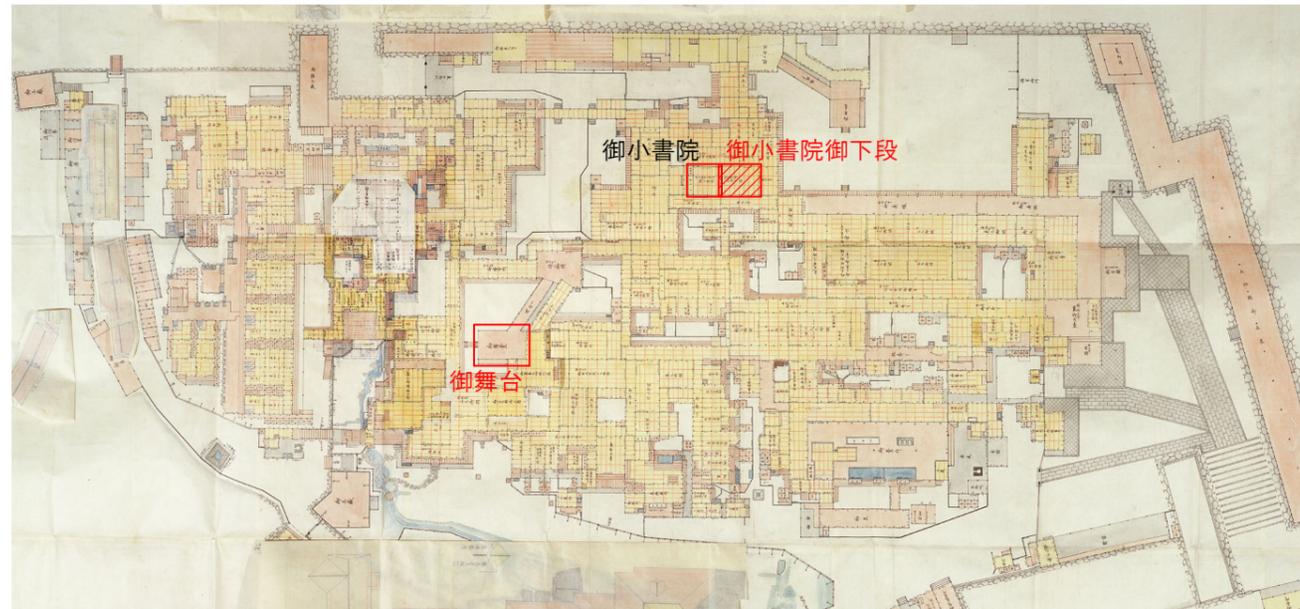


二の丸御殿御造営内装等覚及び見本・絵形より

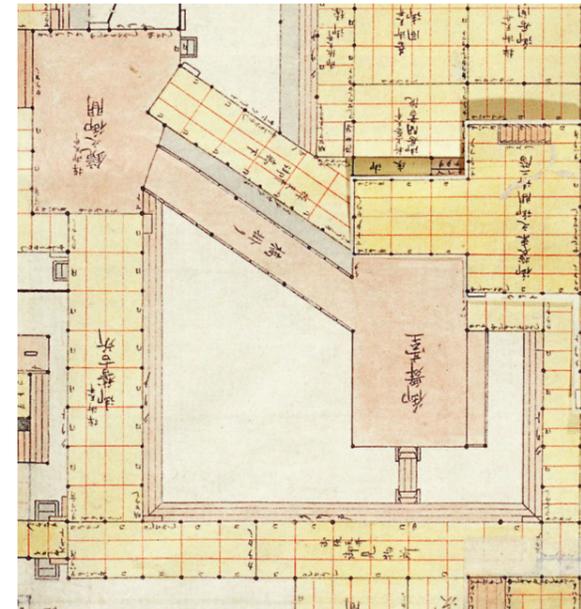
御小書院 御上段 (3間×3間)	御下段 (3間×4間)	折上格天井
芙蓉之御間 (2間×2間)		格天井
瀧之御間 (2.5間×4間)		格天井
奥御書院 御上段 (3間×3間)	御下段 (3間×3間)	折上格天井
御居間書院 (2間×3間)	御次 (3間×4間)	格天井

6. 小屋組の検証

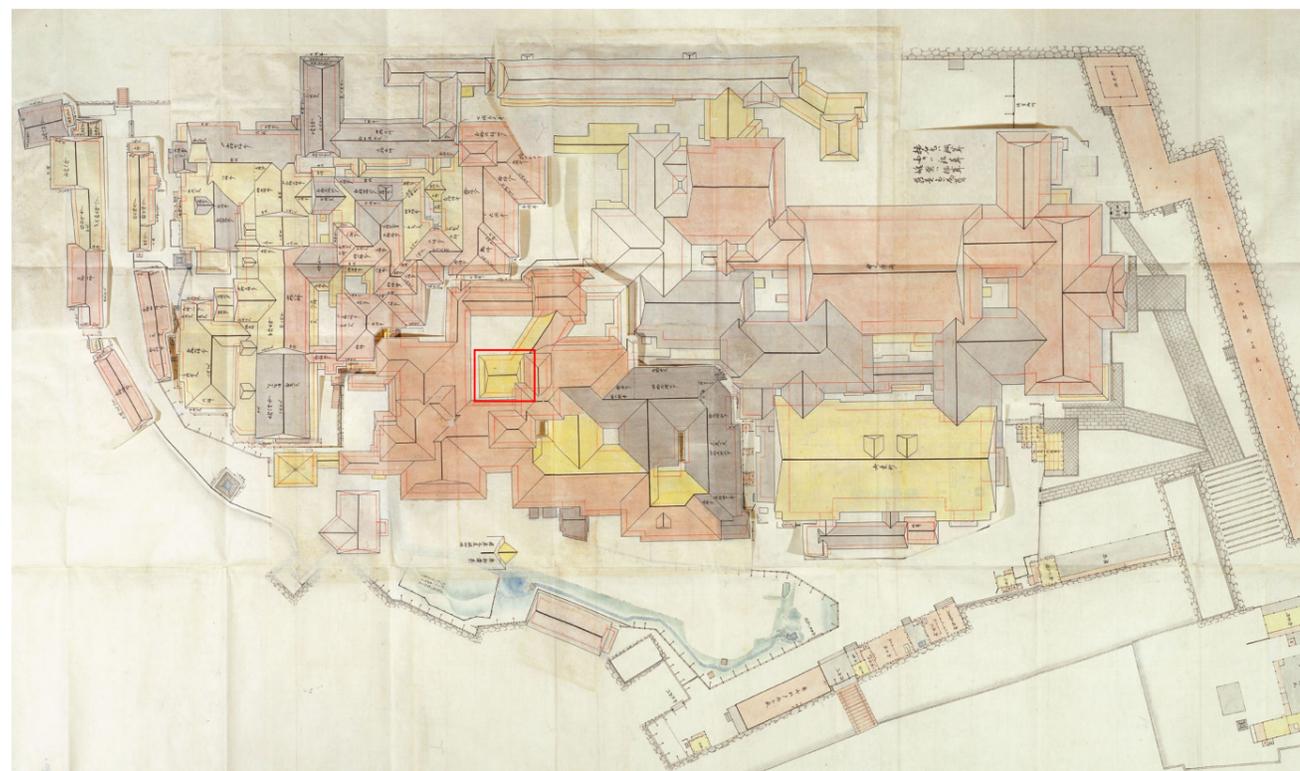
現在の小屋組の番付は小屋束や母屋に建物正面を字前に番付が打たれているのに対して、旧番付は現在の東側面を字前にして番付が書かれており、二の丸御殿奥能舞台から卯辰山峯招魂所拝殿として移築する際に妻入りから平入りになるように小屋組を90度回転させている。



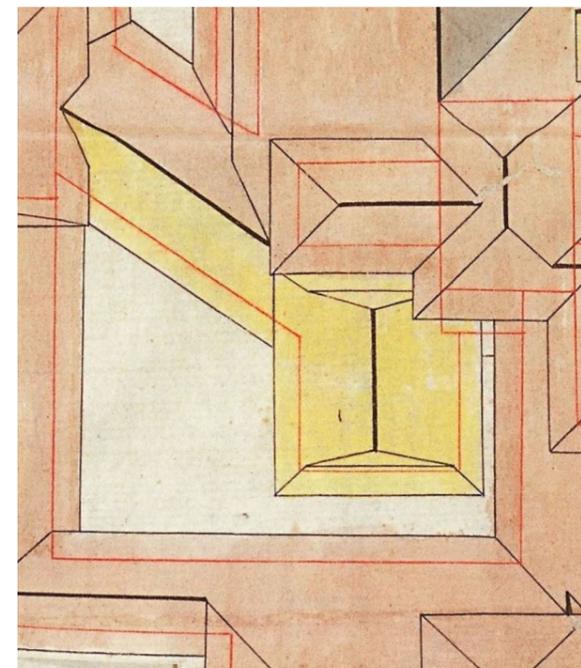
金沢城二之御丸三步基図Bより



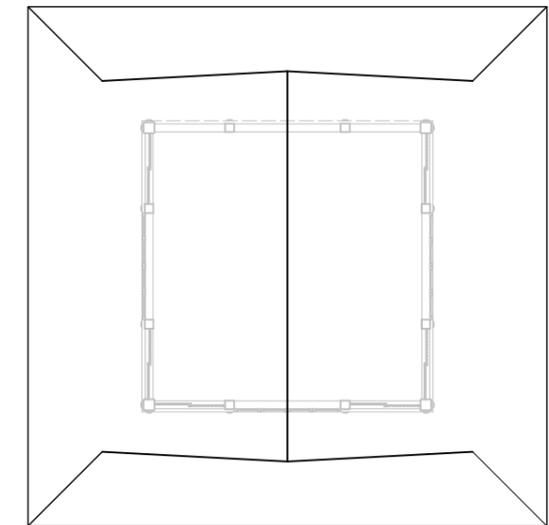
同左御舞台（奥能舞台）付近



金沢城二之御丸三步基図B屋根伏張紙より

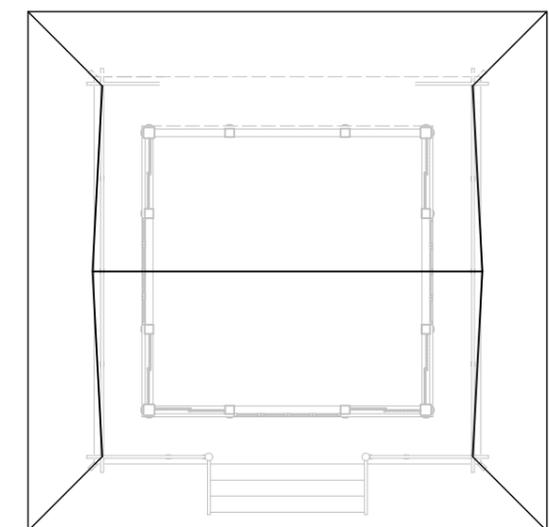


同左御舞台（奥能舞台）付近



▲ 妻入り

金沢城二の丸御殿奥能舞台



▲ 平入り

卯辰山峯招魂所拝殿

7. 樹種区分図

樹種の確認を行い、区分図を作成した。内装等覚には、一部、樹種の記載があり、該当箇所を以下に示す。  
軸部、造作について、調査結果と内装等覚が一致するものがいくつか確認された。

内装等覚（該当箇所のみ抜粋）

a. 奥御舞台

- 一、御柱・水引梁・敷居長押・ハメ板・敷板・高欄・接物トモ大坂廻り檜材木
- 一、軒廻り、垂木・木舞・裏板・萱負・布裏等、大坂廻り椴材木
- 一、接物三斗備墓股・同大斗・雲・臂木トモ梶
- 一、御屋根柿葺、裏甲軒付草槇柂樺、葺板草槇柂樺五ツ切一分板ニテ八分足葺
- 一、御正面二階壇一ヶ所、檜ニテ出来

b. 御小書院御縁側トモ

（樹種に関する記述なし）

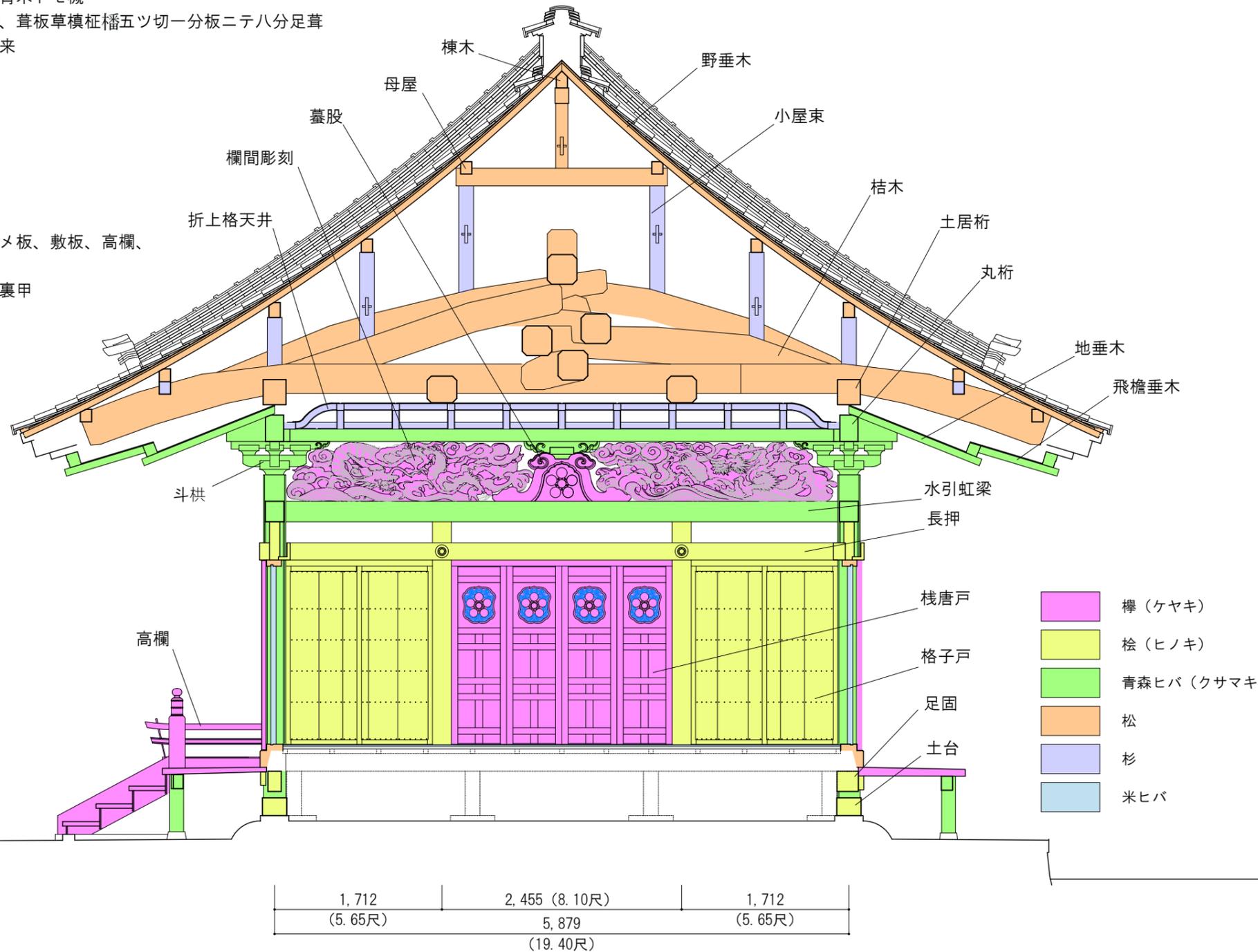
内装等覚から得られた樹種の情報

a. 奥能舞台

- ・檜：御柱、水引梁、敷居長押、ハメ板、敷板、高欄、接物、階段
- ・椴：垂木、木舞、裏板、茅負・布裏甲
- ・梶：三斗、墓股、大斗、雲、肘木
- ・草槇：裏甲軒付、葺板

b. 小書院（天井）

・樹種に関する記述なし



土台	檜 (M)
隅柱	青森ヒバor檜 (E)
間柱	檜 (M)
足固	檜 (M)
床束	未確認
大引	未確認
根太	未確認
旧床板	未確認
化粧床板	米ヒバ (S)
縁長押	松 (M)
敷居	松 (M)
鴨居	松 (M)
内法長押	檜 (M)
水引虹梁	青森ヒバor檜 (E)
墓股	樺 (E)
斗きょう	青森ヒバ (E)
欄間彫刻	樺 (E)
丸桁	青森ヒバ (E)
天井格縁	杉 (E)
化粧垂木	青森ヒバor檜 (M)
木負・茅負・裏甲	青森ヒバor檜 (M)
土居桁	松 (E)
桔木	松 (E 転用材)
小屋束	杉 (E 転用材)
小屋二重梁	松 (M)
棟束	松 (E 転用材)
棟木・母屋	松 (E 転用材)
棟木下添木	松 (E 転用材)
差棟木・差母屋	松 (E 転用材)
破風・裏甲	青森ヒバ (M)
破風軒付	松 (S)
妻壁板	松 (S)
雲筋違	松 (S)
野垂木	松 (S)
木舞	松 (S)
縁板掛	檜 (M)
縁束	青森ヒバ (M)
縁葛	青森ヒバ (M)
縁板	樺 (M)
高欄	樺 (M)
木階	樺 (S)
棧唐戸	樺 (M)
格子板戸	檜or青森ヒバ (M)

E 江戸材  
M 明治材  
S 昭和材

梁間断面図

8. 時代区分推定図

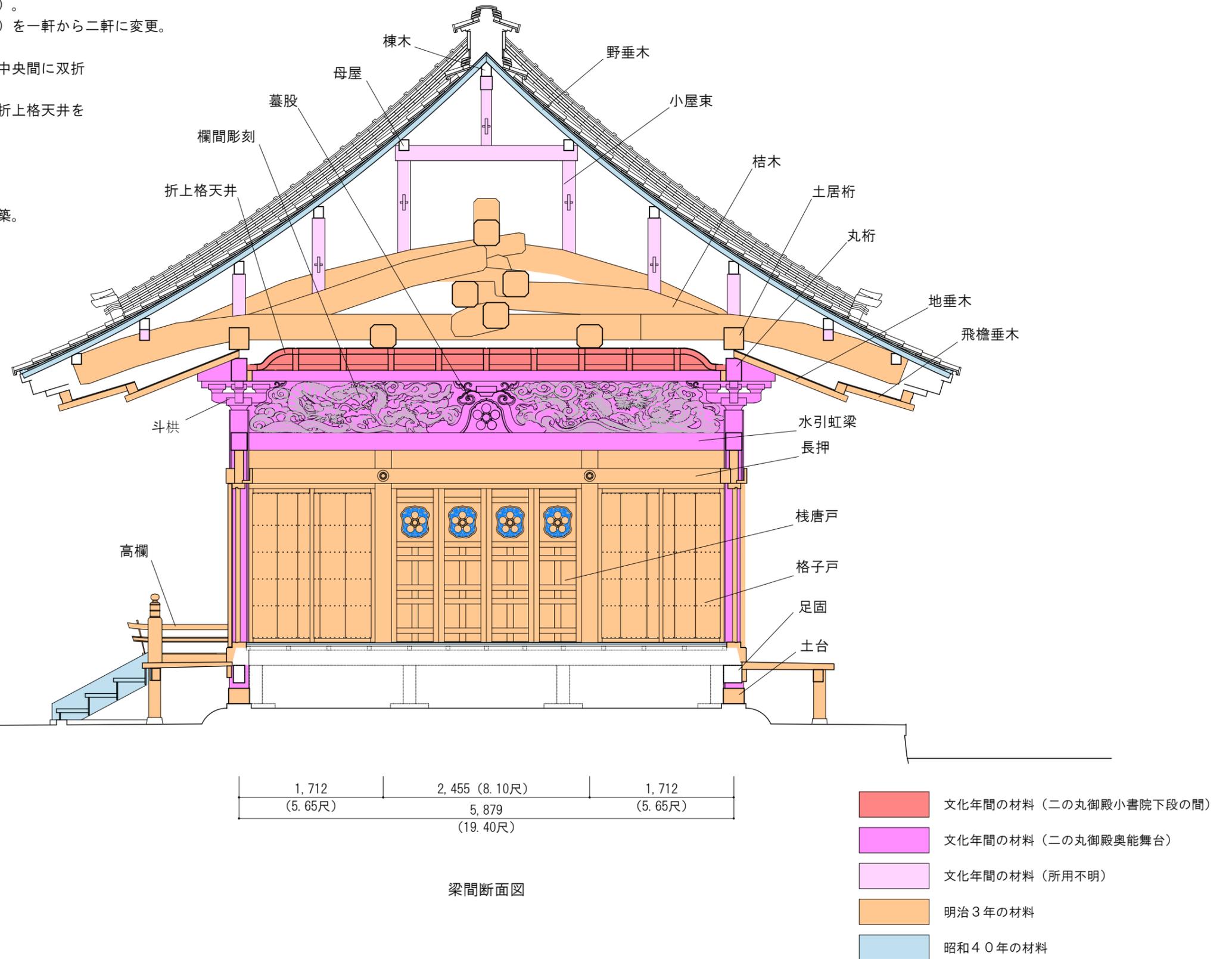
明治3年 二の丸御殿奥能舞台から軸部及び墓股・欄間彫刻を移築。  
 小屋組のうち土居桁、桔木、差母屋、差棟木を取替えた。  
 小屋束は再用（能舞台の小屋束を再用したかは不明）。  
 軒廻り（地垂木、飛檐垂木、木負、茅負、化粧隅木）を一軒から二軒に変更。  
 破風板、登裏甲を取替えた。  
 各隅柱間に2本の柱を建てて敷鴨居と長押を回して中央間に双折  
 棧唐戸、脇間に引違格子戸を建て込む。  
 その際、二の丸御殿御小書院御下段の3間×4間の折上格天井を  
 3間×3間に切り縮めて天井とした。  
 縁を4周に廻した。

昭和40年 卯辰山の招魂社から中村神社に拝殿を移築。  
 軸部及び墓股・欄間彫刻、小屋組、各柱間装置を移築。  
 屋根野垂木と正面の木階を取替えている。

<時代区分できなかった部材>

足 固 明治3年の材料orそれより前  
 床 組 調査できなかった範囲（床束・大引・根太・旧床板）

棟木・母屋 明治3年の材料orそれより前



梁間断面図

9. 欄間彫刻写真



外部南正面



外部東側面



外部北背面



外部西側面



内部南面



墓股



内部東面



内部北面



内部西面

## 中村神社 天井画



②左

①右

法量 最大値	修理前			
	本紙寸法	①右	縦50.6 cm	横50.6 cm (古い方)
		②左	縦50.0 cm	横51.0 cm (新しい方)
	修理後			
	本紙寸法	①右	縦50.6 cm	横51.0 cm
		②左	縦50.0 cm	横51.0 cm

### 形状・品質

- ・中村神社拝殿に額装仕立てで飾られている格天井の天井画。
- ・本紙は金箔地に着色され、2点ともほぼ同じ文様が描かれる。
- ・額に入っているが、天井画は台紙に糊付けされておらず、天井画裏面に下張りとして推測される紙が付着している。天井画を下地から外し、現状の額へ挟み込んだと推測される。

### 損傷状況

- ・絵具層が層状・粉状剥離していた。
- ・経年の劣化で本紙の紙質が低下し、既に欠失している箇所や破損、亀裂があった。

### 調査の内容

- ・修理前後の寸法測定、写真撮影等を行った。
- ・絵具（顔料）の採取を行い、蛍光エックス線による分析を行った。
- ・裏面の下張り紙を慎重に取り外し、年代などを調査した。

### 修理の内容（主要なもの）

- ・彩色の剥落止めを行った。
- ・裏打や補紙を行い、本紙を補強した。但し、法量の保持のため、周囲へ補紙は行っていない。
- ・剥離箇所は膠水溶液の噴霧等により接着した。
- ・刷毛等で埃のクリーニングを行った。

（調査及び修理実施機関 石川県文化財保存修復協会）

## 修理後の天井画



②



①

### 顔料分析結果

測定機関 石川県工業試験場  
測定装置 蛍光 X 線分析装置EA6000VX ID\_6663  
定量条件 バルクFP

- ・天井画 2点のそれぞれに対応する金、白色、赤色、青色、緑色箇所の絵具を採取し、上記の装置と条件で蛍光X線による分析を行った。

#### 顔料分析結果

	No. 1 白	No. 2 緑	No. 3 青	No. 4 赤	No. 5 金
①定量結果 顔料	カルシウム 胡粉	銅 緑青	銅 群青	硫黄 水銀辰砂	金 金箔
②定量結果 顔料	カルシウム 胡粉	銅、ヒ素 花緑青	硫黄、ヒ素 ラピスラズリか	水銀 水銀朱	金 金箔

### 「内装等覚」の記述

#### 一、御小書院 御縁側トモ

- 一、御上檀・御下檀トモ折揚基御天井、基之内御張付惣金、基廻縁蝨色塗  
御画 唐花 極彩色 画史 梅田九栄
- 一、基御天井辻金具并散シ金具トモ 七十印

### 考察

- ・①と②で緑色、青色、赤色の顔料が違うことが判明し、2点は同時期に描かれたものではないと考えられる。
- ・①と②ともに金は平滑で箔足があることから金箔であると考えられる。
- ・①は紙が継がれており②は紙が継がれていないため、①は紙が貴重だった古い時代のものと推測できる。
- ・内装等覚に記述される小書院の仕様と一致し、小書院格天井の天井画と推測できる。
- ・痕跡等からそれぞれ修理がされていると考えられる。

## 建具類例 舞良帯戸

建具の類例として、丸岡家（金沢職人大学校蔵）の舞良帯戸について調査を行った。調査成果を以下に示す。

復元イメージ図の作成にあたり、舞良戸、杉戸については、部材寸法等をこの建具に倣うこととした。舞良帯戸は、虎之御間、同二之御間、御鍵之間に入る。

規模 幅2,409mm×高1,754mm×厚73mm (7.95尺×5.79尺×0.24尺)  
 材種 杉  
 戸車穴 3箇所

縦 框 不明 幅148mm × 厚73mm (0.49尺×0.24尺)  
 上 框 不明 幅138mm × 厚59mm (0.45<sup>5</sup>尺×0.19<sup>5</sup>尺)  
 下 框 不明 幅141mm × 厚61mm (0.46<sup>5</sup>尺×0.20尺)  
 帯 棧 不明 幅206mm × 厚55mm (0.68尺×0.18尺)  
 舞良子 不明 幅 48mm × 厚21mm (0.16尺×0.07尺)  
 縦 板 杉 幅227~242mm × 厚15mm (0.75~0.80尺×0.05尺)

・縦板以外の框、棧等は塗装されており樹種の判断ができなかった。  
 上框の上端からは桧か青森ヒバではないかと考えられる。



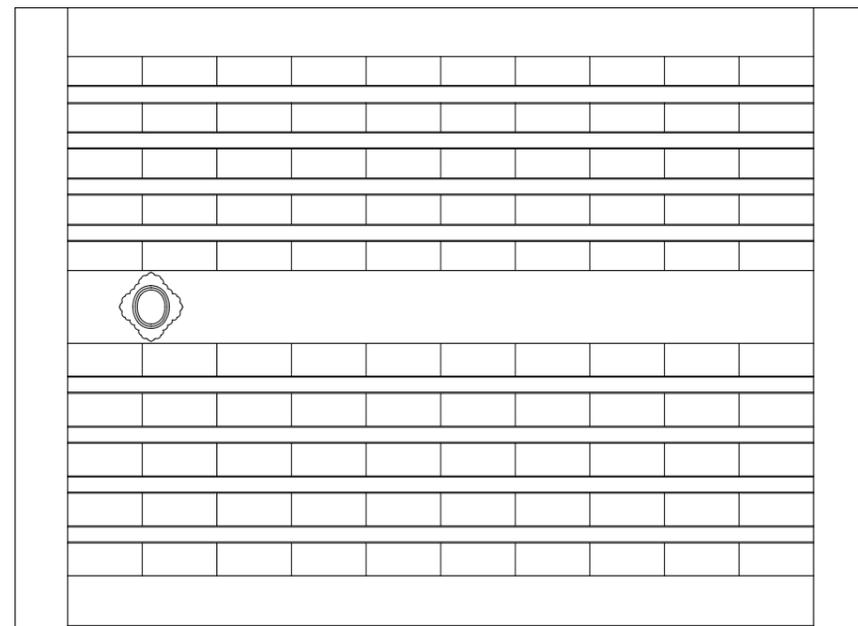
舞良帯戸（背面）



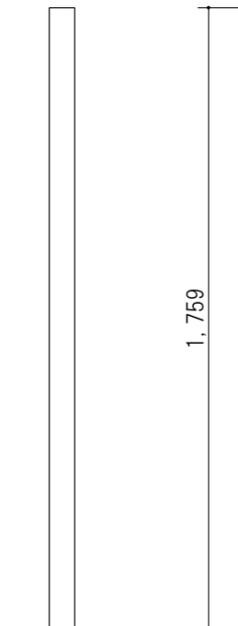
引手金具（背面）



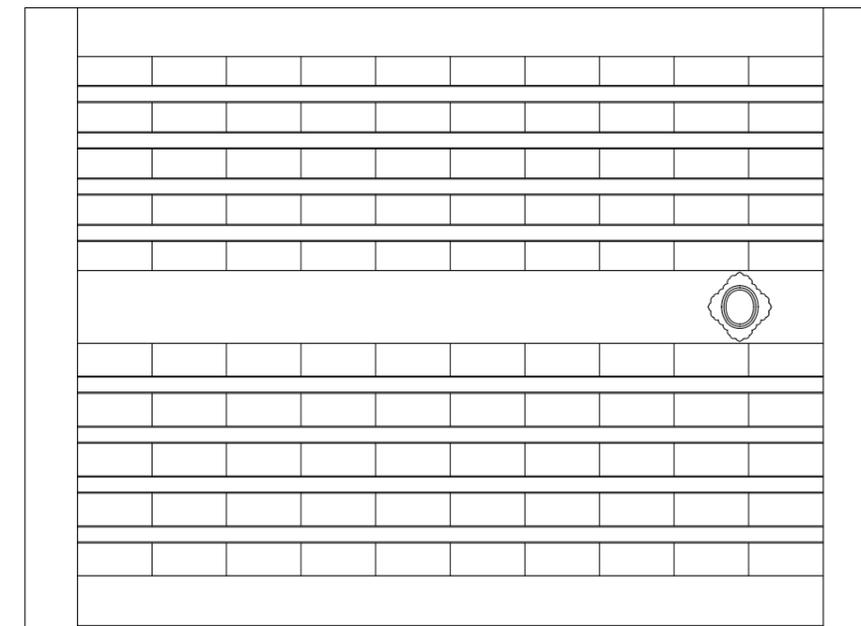
縦框・上框仕口



正面姿図

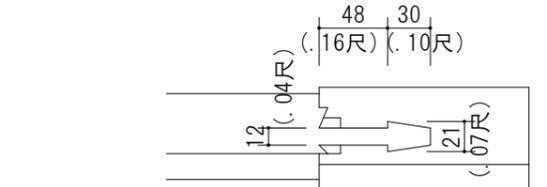
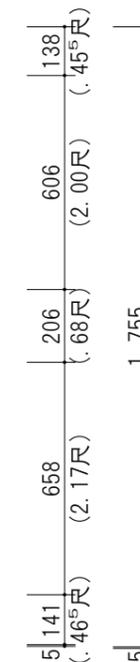
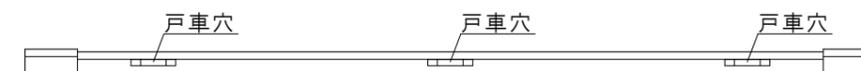


71  
(.23<sup>5</sup>尺)



背面姿図

148 | 2,112 | 148  
(.49尺) | | (.49尺)  
2,409  
(7.95尺)



鎌継  
縦框・上框詳細図 S:1/5

建具類例 潜り付障子雨戸（成巽閣）

建具の類例として、成巽閣の潜り付障子雨戸について調査を行った。調査成果を以下に示す。  
 内装等覚には「捲り御障子」とあり、場所によって腰に往来口の有無と数の記載がある。この建具は、虎之御間広縁、竹之御間広縁に入る。

規 模 幅1,133mm×高2,466mm×厚27mm (3.74尺×8.14尺×0.09尺)  
 材 種 杉  
 戸 車 2箇所



成巽閣広縁の潜り付障子雨戸



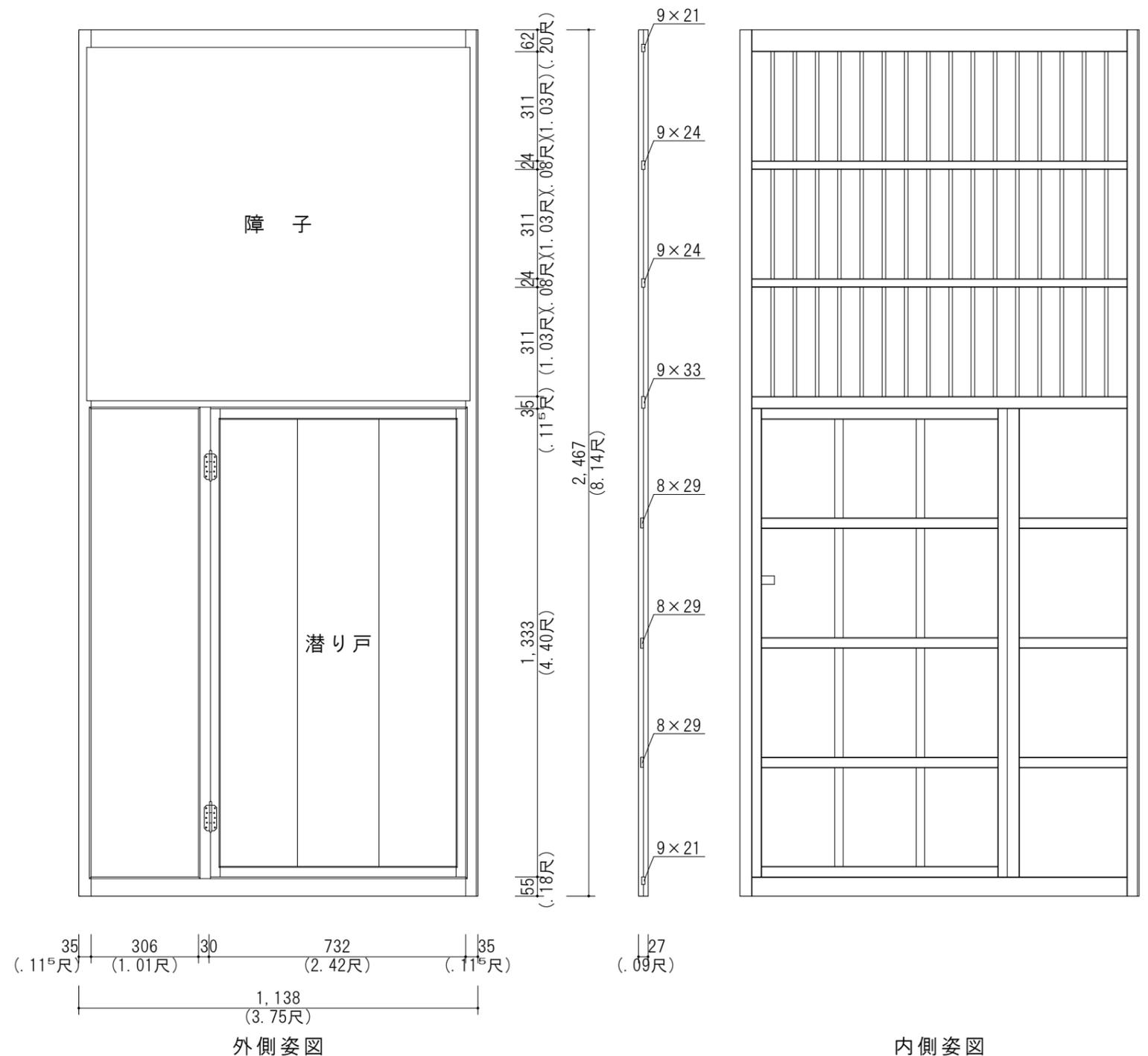
外側 潜り戸



内側



潜り戸丁番



縦 框	杉	幅 30mm × 厚35mm (0.10尺×0.11 <sup>5</sup> 尺)
上 框	杉	(幅55mm) × 厚33mm (0.18尺) × 0.11尺)
下 框	杉	幅 52mm × 厚33mm (0.17尺×0.11尺)
中 棧	杉	幅 35mm × 厚33mm (0.11 <sup>5</sup> 尺×0.11尺)
上部横棧	杉	幅 24mm × 厚33mm (0.08尺×0.11尺)
上部縦棧	杉	幅 10mm × 厚17mm (0.03 <sup>3</sup> 尺×0.05 <sup>5</sup> 尺)
下部縦棧	杉	幅 35mm × 厚18mm (0.11 <sup>5</sup> 尺×0.06尺)
下部横棧	杉	幅 30mm × 厚17mm (0.10尺×0.05 <sup>5</sup> 尺)
下 部 板	杉	幅306mm × 厚 6mm (1.01尺×0.02尺)

潜り戸

縦 框	杉	幅 27mm × 厚18mm (0.09尺×0.06尺)
上 框	杉	幅 27mm × 厚18mm (0.09尺×0.06尺)
下 框	杉	幅 27mm × 厚18mm (0.09尺×0.06尺)
中 棧	杉	幅 30mm × 厚17mm (0.10尺×0.05 <sup>5</sup> 尺)
縦 目 板	杉	幅 24mm × 厚 6mm (0.08尺×0.02尺)
縦 板	杉	幅224mm × 厚 6mm (0.74尺×0.02尺)

白山市山岸家が保有する杉戸  
 内外面の画題構成は「内装等覚」の記載と一致しないが、金具は全8点とも「内装等覚」の絵形とほぼ一致するもの

【杉戸1】 1851 (6尺1寸) × 1310 (4尺3寸2分)



おいまつ  
老松

おしどり  
雪柳、鴛鴦

【杉戸2】 1838 (6尺6分) × 1310 (4尺3寸2分)



ひなぎく  
雛菊、(金鶏または鴛鴦)

おいまつ むれすずめ  
老松、群雀

【杉戸3】 1851 (6尺1寸) × 1311 (4尺3寸2分)



かきつばた  
杜若

さぎ やつはし かきつばた  
鷺、八橋、杜若

【杉戸4】 1844 (6尺8分) × 1307 (4尺3寸1分)



かきつばた  
杜若

さぎ こうほね  
鷺、河骨

山岸家杉戸の引手金具



縁座 縦129×横118mm

金具の形、意匠及び技法は、「内装等覚」四十四印の引手絵形と概ね共通している。

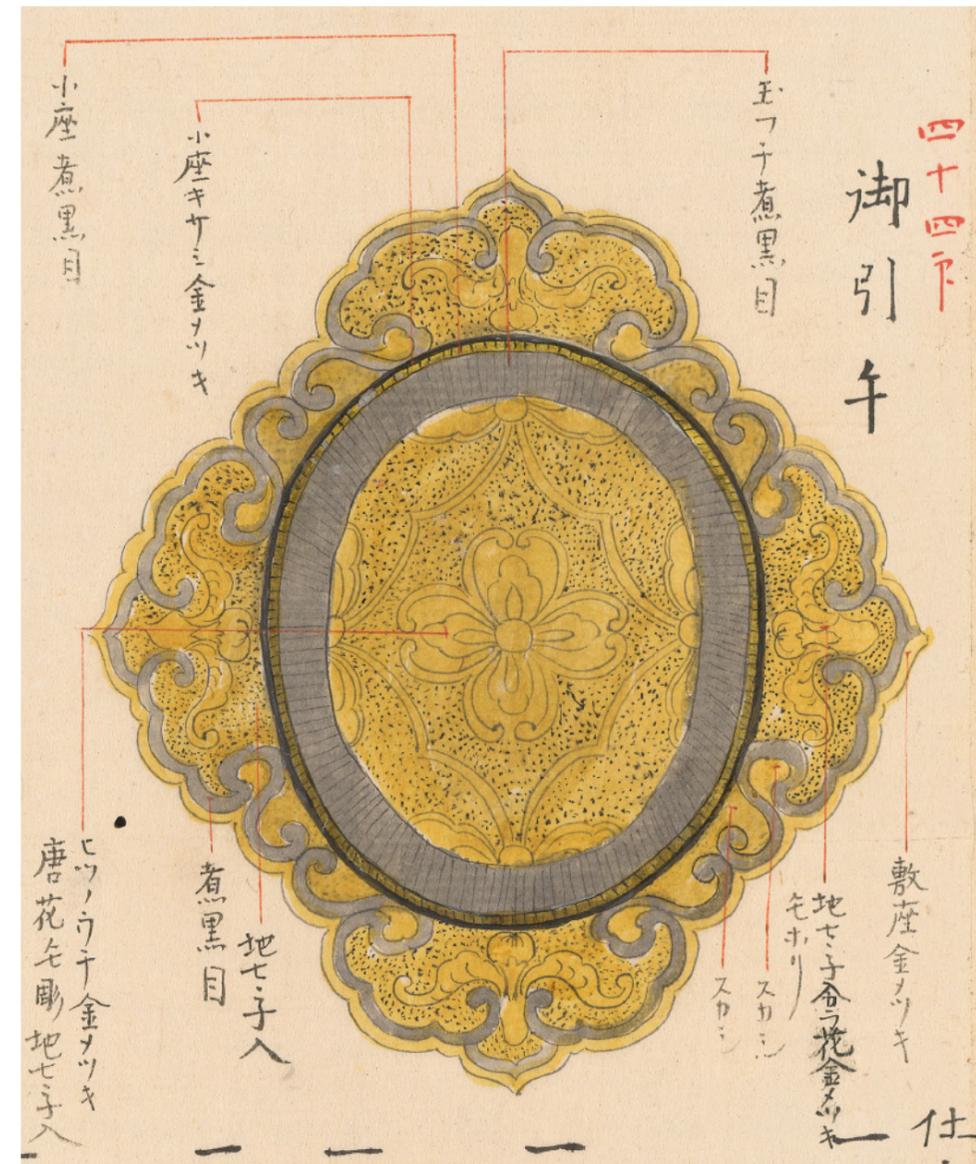
共通する要素

- 全体形 木瓜形（四方が尖る）  
 寸法 44印の中サイズ「立四寸三分 横三寸九分」（130×118mm）に対応  
 意匠・技法 [敷座] 金鍍金、  
 [縁] 透かし彫り、縁にニグロメの唐草、中に花蕾文を毛彫、地にナナコ  
 [手掛かり] 金メッキの小座、七宝形の内に唐花文を毛彫、地にナナコ

異なる要素

手掛の縁金の部品構成が異なる。金具は玉縁、「内装等覚」の絵形は帯状の縁金（ただし、金メッキの小座を伴い、縁金がニグロメ仕上げであることは共通）

「内装等覚」の杉戸引手44印



四十四印の引手は、縁の透かし彫りが特徴。御殿の杉戸引手として、表向から奥向まで、御殿各所で使用された。

44印中サイズの引手が使われた杉戸の位置

- ・瀧之間、同廊下
- ・続芙蓉之間横廊下
- ・小書院より檜垣之間への廊下
- ・小書院縁側二間
- ・装束之間廊下、同続鏡之間への廊下
- ・松之間、同縁側
- ・奥書院、縁側
- ・奥書院上壇横廊下
- ・蔦之間二之間、同縁側、同続波之間への廊下
- ・檜垣之間縁側
- ・柳之間縁側、同廊下
- ・波之間縁側
- ・桐之間廊下廻、大廊下
- ・御居間三之間、蔦之間への廊下

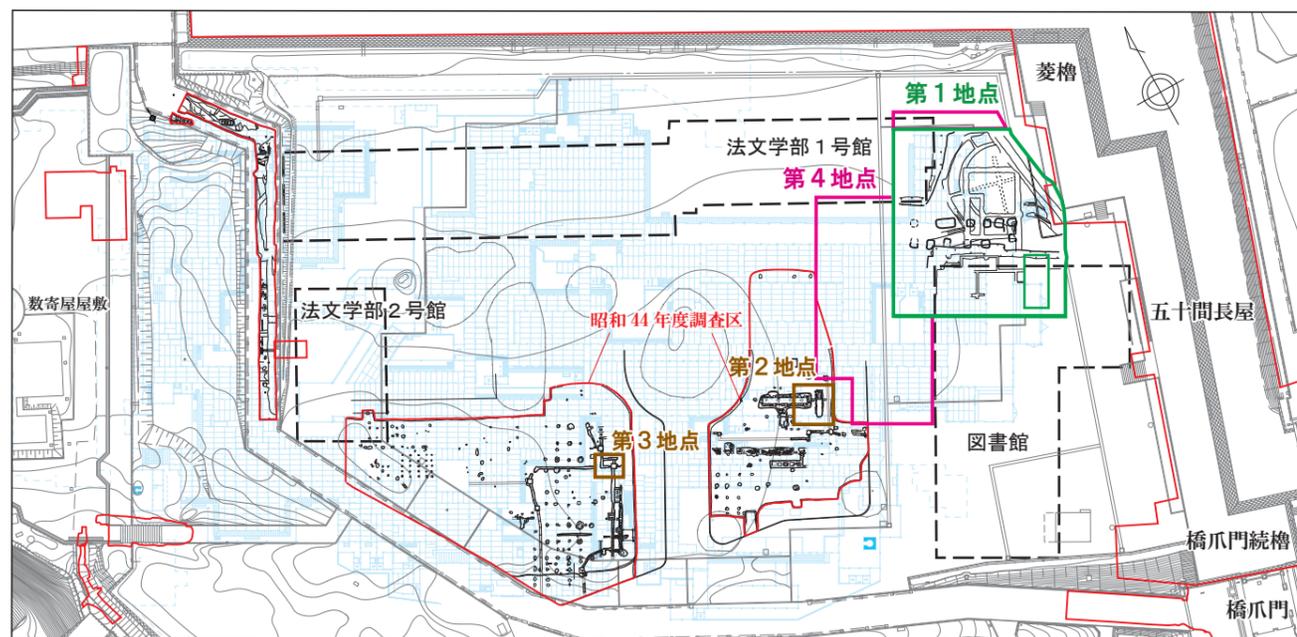
## 1. 概要

近世前期以降、金沢城の中核部で、明治14年(1881)に焼失するまで存在していた二ノ丸御殿について、埋蔵文化財確認調査を実施し、遺構の位置や内容等を確認することで、復元整備の根拠となる情報を取得し、遺構の確実な保存を図る。

## 2. 令和2年度調査

調査期間：令和2年7月2日～12月18日 調査面積：1,000㎡  
 現地指導：令和2年11月19日(金沢城調査研究埋蔵文化財専門委員会委員及び伝統技術(石垣)専門委員会委員)  
 現地公開：令和2年12月5日  
 調査成果

- ・第1地点は御殿の北東部(唐門・式台北・実検ノ間付近)にあたる。この付近は、これまで発掘調査が実施されておらず、御殿の範囲を確定する上で重要な区域である。
- ・調査の結果、現地表から約1m下位で、明治14(1881)年の火災で廃絶した御殿の地盤(遺構面)を検出した。建物の柱を支えた礎石自体は撤去されていたが、礎石の安定を図るため堅固に作られた基礎を確認した。今回精査した範囲は、絵図との照合から、「表式台」北辺及びその北側の「広縁」北辺に対応すると考えられる。
- ・御殿の地盤は、廃棄された瓦等とともに埋立てられ、嵩上げされていた。埋立土の上面で旧陸軍により設けられた馬場の遺構を確認した。この他、昭和3(1928)年の馬場廃絶後に建てられた会議室のコンクリート基礎を検出した。
- ・第2地点は表向主要部と台所の境、第3地点は表向と御居間廻りの境にあたる。両地点とも石川県教育委員会・金沢大学が昭和44年度に実施した発掘調査地点の一部に相当する。今回の調査では遺構について再検出し、公共座標に基づく位置情報等を取得した。



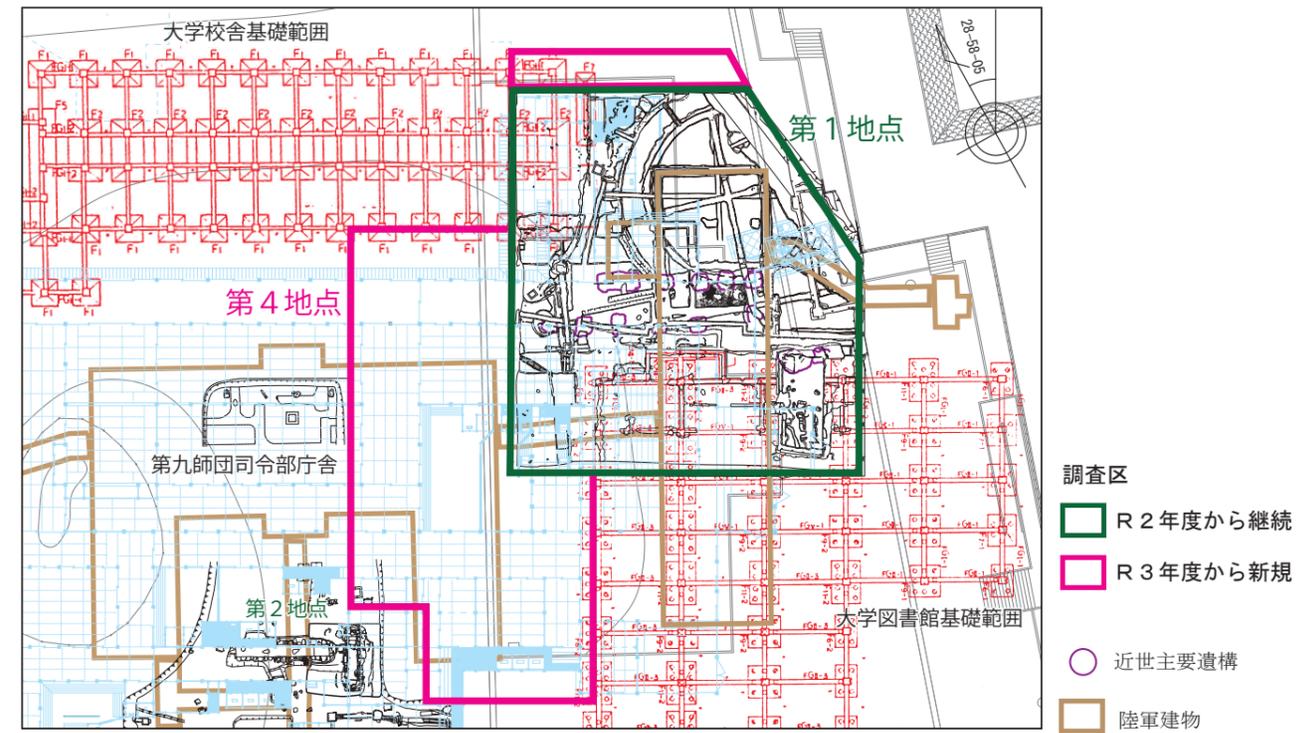
令和3年度調査範囲(2年度より継続)  
 令和3年度調査範囲(新規)  
 令和2年度調査範囲  
 既往の調査区(二ノ丸付近)  
 金沢大学校舎・図書館があった範囲  
 ※青線：近世後期の二ノ丸御殿(部分)  
 「二ノ丸御殿建物指図」(金沢市立玉川図書館蔵)等を参考に作成

二ノ丸調査区等配置図

## 3. 令和3年度調査

調査期間：令和3年5月17日～12月下旬 調査面積：1,600㎡  
 調査内容

- ・第1地点では昨年度に引き続き調査を行い、広縁北辺・表式台北辺の礎石基礎の精査を進めるとともに、実検ノ間等の遺構を検出する。
- ・また調査区を南西側に広げ(第4地点)、広縁北辺・表式台北辺の礎石基礎の延長を追求し、虎ノ間・竹ノ間等の遺構を検出する。
- ・あわせて二ノ丸に建設されていた陸軍第九師団司令部庁舎の基礎遺構についても確認する。



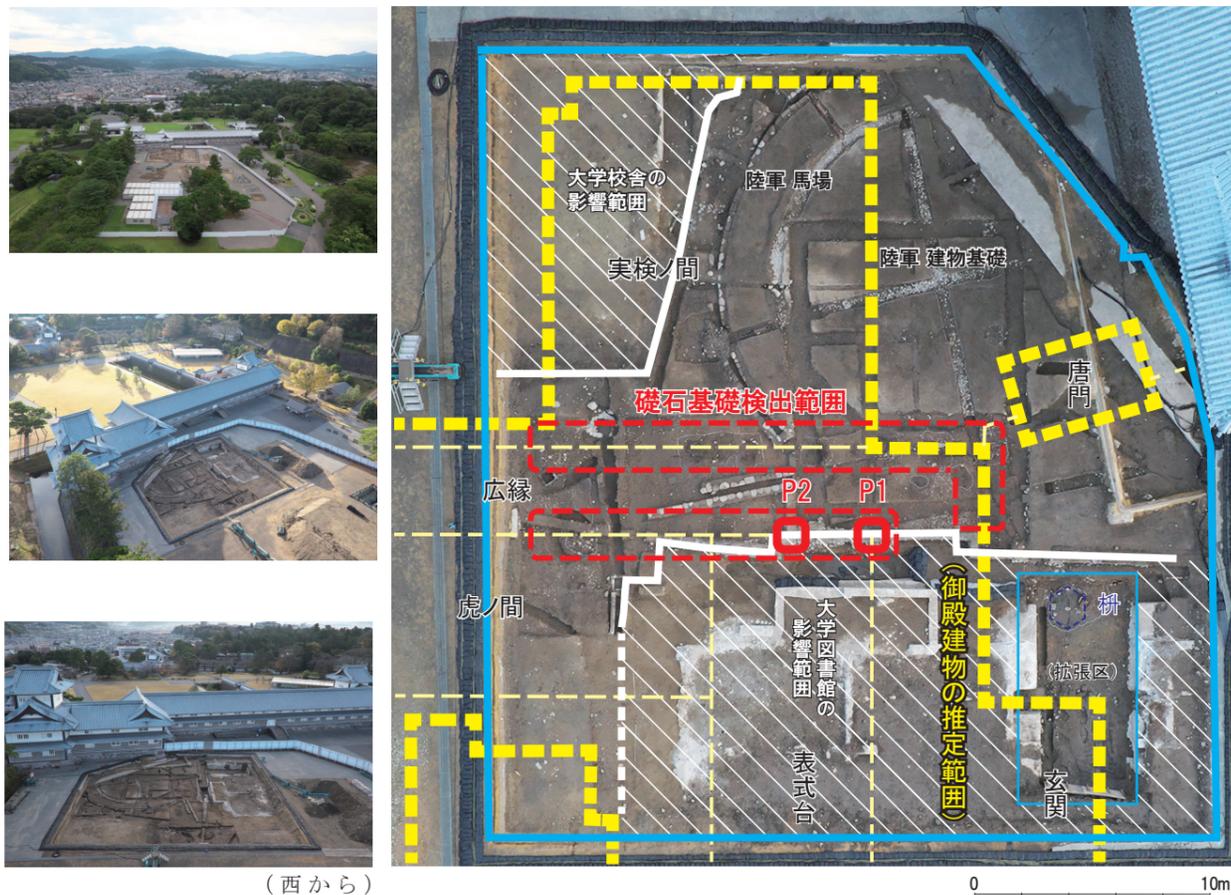
※青線：近世後期二ノ丸御殿(部分)  
 「二ノ丸御殿建物指図」(金沢市立玉川図書館蔵)等を参考に作成

調査区等配置図(第1地点・第4地点)



「二の御丸惣絵図(三歩基)」金沢大学附属図書館蔵

調査区の位置と絵図



(西から)

第1地点航空写真・垂直写真（令和2年度）

第1地点（令和2年度）



礎石基礎P2断面



礎石基礎P1断面

幅1.2～1.4m、深さ約1mの略方形の穴を掘り、川原石や戸室石の割材を詰め込んで礎石の安定を図っている。



礎石基礎列（広縁北辺・表式台北辺に対応）

第2地点



くぐり抜け階段

近世後期の遺構。廊下の床下をくぐり抜けて、中庭に出入りした通路である。

第4地点（令和3年度）



第九師団司令部庁舎煉瓦基礎（北西から）



近代の遺構（馬場・会議室）

第3地点



調査区全景

排水施設として石製樋と「溜」（枡）が検出されている。

第1・4地点（令和3年度）



作業風景（第1地点北西から）